

## 第4章

# 陸上研修・船上研修の成果



## 陸上研修・船上研修の成果

今年度は6日間の陸上研修と、訪問国活動及び給油・給水のために寄港したバヌアツ、ソロモン諸島を除く26日間の船上研修が行われた。昨年度まで実施されていた公式プログラムに加え、今年は新たにアドバンス・セミナーとスキルセミナーを導入した。アドバンス・セミナーは、3名のアドバイザーが同時に異なる場所でセミナーを行い、参加青年は自身の興味・関心に基づいてどのセミナーに参加するかを選ぶ選択制のセミナーとした。参加青年全員を対象とする通常のセミナーに加え、アドバンス・セミナーを実施することで、異文化理解、リーダー

シップ、プロジェクトマネジメントについて、対象者を絞ってより深くテーマについて掘り下げる機会を設けることができたといえる。また、スキルセミナーは、参加青年同士が、自身の経験や専門知識を共有するPYセミナー、文化や慣習を紹介するクラブ活動に加え、船内の研修や事後活動にいかせる実践的なスキルを互いから学ぶ、参加青年主導の研修として新たに導入した。参加青年が主体性を発揮できる機会の拡大と体系化に貢献できたといえる。

それぞれの研修内容と成果は以下のとおりである。

## コース・ディスカッション

### 1 ねらい

コース・ディスカッションは、「青年の社会貢献」を共通のテーマとし、①ダイバーシティ推進とインクルーシブ社会の実現、②平和構築のための対話型アプローチ、③防災活動のための人材育成、④国際貢献活動、⑤責任あるツーリズム、⑥青年のエンパワメントの6コースを設定した。

主に、各分野について学ぶとともに、多国籍の参加青年が実体験に基づく発表や意見交換をすることで、各国事情について事例を通して理解を深める場として設定した。さらに、ディスカッションを通して、課題解決のために自ら取り組める分野を見付け出し、その実現に向けて具体的な活動を組み立てることをねらいとした。

各コースとも、参加青年同士の活発なディスカッションと交流を学習の主軸とし、各国が抱える社会問題や国を問わず共通して取り組むべき課題について理解を深め、事業終了後の社会貢献への意欲とスキルの向上を掲げ、参加青年一人一人の将来の具体的な活動の在り方を模索する機会を積極的に提供するコース作りを目指した。

コース・ディスカッションで期待される成果は以下のとおりである。

- 自国の現状や課題について調べ、発表し、それに対するフィードバックを得ながら、コースでの学びをいかして今後、自分自身がどのようにリーダーシップを発揮し、社会に貢献できるかを考える。(情報収集力、発想力を身に付ける)
- 多国籍の参加青年と意見交換をし、各国の状況について「生の声」を聞くことで、各分野の実情への国際的理解を深める。(理解力、ディスカッション力、コミュニケーション力を身に付ける)
- 社会において、自らがアクションを起こせる活動が何か考え、企画する。(企画力を身に付ける)
- コース・ディスカッションやプロジェクトマネジメント・セミナーでの学びをいかし、事後活動に関する各自のアクションプランを作成し、自国に帰った後、活発に活動を実施する。(実践力を身に付ける)

## 2 課題別視察

1月26日には、六つのコースの内容に即した課題別視察を実施した。各コースにはボランティアが同行し、

スムーズな運営に協力した。

### ダイバーシティ推進とインクルーシブ社会の実現コース

視察先：日本航空株式会社 (JAL) 人事部ダイバーシティ推進グループ

羽田空港近郊の JAL メンテナンスセンターを訪問し、まず、人事部ダイバーシティ推進グループの宮下雅行氏からお話を伺った。JAL の誕生とこれまでの歩み、多様な人材が活躍できる職場にするための取組等を御紹介いただいた。その後、少人数のグループに分かれ、3部構成で直接社員の方と意見交換を行った。

第1部では、カフェを見学し、JAL グループで働いている障害のある社員との意見交換を行った。参加青年からは仕事環境やシフトはどうなのかという質問や採用方法等、多くの質問が飛び交った。障害のある社員は「SKY CAFÉ Kilatto」という軽度の知的障害がある社員を中心に運営しているカフェの飲み物の提供や様々なオフィス業務を行っており、一人一人が果たすことのできる責任を適切に割り振ることの重要性や、多様な人材活用に当たっては、場の工夫が大切であることが感じられた。また、障害のある社員一人一人に「見守り役」というチューターのような役割の人が付いていた。その見守り役の多くは元客室乗務員であり、客室乗務員として得られた豊富な知識が生かせる点や礼儀作法や対人業務をも指導できるという点が企業の人材力を総合的に活用していることがよく分かった。

再び会議室へ戻り、第2部は外国籍社員、第3部で女性社員との意見交換を行った。JAL では外国籍社員向けの日本派遣制度や日本語教育制度等の育成プログラムが整備されており、日本国内のみならず現地採用等も行って積極的に外国籍社員を採用している。米国、中国、ミャンマー出身の社員と意見交換を行った際、外国籍社員は日本企業及び日本で働く不安があったが、多くのサポートに支えられて今では楽しく業務を行えるとおっしゃっていた。また、会社にとっても多様な視点から得られるメリットがあることも分かった。女性社員との意見交換の中では、飛行機の安全管理業務を行っているエンジニアの体験も聞くことができた。天候やフライト時間帯の関係で業務時間帯が深夜勤務になることもあるが、安全を第一にお客様へ最高のサービス提供したい、という思いが彼女のモチベーションとなっていた。また米国にあるエアバス社に出向する機会がある等、女性でも海外で働くチャンスが多くある、という点も大きく印象に残った。参加青年は特に、多様な人材登用のあり方や、自国と比較して女性社員に対するキャリアサポートの手厚さや育児休暇などの制度等に興味を持っており、終始質問が絶えることがなかった。

### 平和構築のための対話型アプローチコース

視察先：認定特定非営利活動法人カタリバ

高校生との対話を大切にしている NPO カタリバを訪問し、林曜平 (ジョン) さんより話を伺った。高校生があだ名の方が呼びやすいためスタッフはあだ名で呼び合っている。2001年に設立、2006年にNPO法人化し、現在も事業を拡大しつつあるNPOだ。カタリバは「カタリ場事業」と「東北復興事業」の二つの事業を軸に、対話を通して高校生が将来に希望を見出し、自己肯定感を高めるための活動をしている。キャリア学習プログラム「カタリ場」は、対話を通して将来や進路への意欲を引き出して高校生の心に火を灯す授業を行っている。正解を教えたり押しついたりするのではなく、価値観を交錯させ、答えを一緒に探す。それが対話である。約6,900名の大学生ボランティアを中心に年間約240高校でカタリ場事業を行っており、参加高校生は47,200名に上っている。岩手・宮城で実施している「東北復興事業」では、震災

の経験を悲しみから強さへをモットーに心のケア、学びのセーフティーネット確保と復興を担うリーダーを輩出するための活動をしている。

今回は、高校生の時にカタリ場に参加し、現在このNPOの大学生ボランティアをしている日本参加青年がいてとても和やかな雰囲気の中で進められた。参加青年からは、大学生ボランティアの募集方法や研修方法、参加高校生への参加前と参加後のアンケートの実施の比較結果、実施する高校との事前の打合せなど、カタリ場を行う準備に対しての質問もいくつか出た。外国参加青年からは、日本は、自殺が多いイメージがあるが、このようなカタリ場の事業で自殺予備軍を救っているのではないかという前向きな意見も出た。体験した高校生のその後について追跡しているのかという質問に対しては、実施5年後10年後の変化について今はしていないが、現

在東京都の文京区で中高生の秘密基地を立ち上げているので、そこを継続させていくことで分かるかもしれないという回答があった。次に人生グラフの作成を行い、ペアになり真ん中のゼロから山になったところ、谷になったところを具体的になぜそうなったかを各2分ずつ話すワークショップを行った。自分の過去と今を見つめてそれを育った環境の違う人に説明することはとても大

変で、2分間では終わらなかった。最後に大学生ボランティアの体験談を聞いた。印象的な言葉は、「高校生と向き合うことは、自分とも向き合うということ」であった。今回の訪問を通じて対話の背景にあることも考えながら、その人のことを受け止めることや自分と向き合うことは、「世界青年の船」事業の参加青年の交流にも通じるであろう。

### 防災活動のための人材育成コース

視察先：特定非営利活動法人 Church World Service Japan / 特定非営利活動法人国際協力 NGO センター (JANIC) / 池袋防災館

参加青年は特定非営利活動法人国際協力 NGO センター (JANIC) を訪問し、理事の定松栄一氏より、JANIC が取り組む防災分野における NGO の連携活動について話を伺った。その後、東日本大震災に対する支援を行う CWS Japan の事務局長であり、防災・減災日本 CSO ネットワーク (JCC-DRR) の主導的な立場を担う小美野剛氏よりお話を伺った。JCC-DRR は JANIC が事務局となり、仙台防災枠組に日本の教訓を反映させるべく共同で提言活動を行った、複数の団体が加盟するネットワークである。

セッションのテーマはパートナーシップをベースとしたリーダーシップについてであった。「各々のリーダーシップを磨く一助となれば」と切り出した小美野氏は、2015年3月に仙台市で開催された第3回国連防災世界会議において災害で生じるリスクを正しく理解しておくことの重要性を訴えた経緯について話し、それまで誰も認識していなかった問題を解決するために必要なリーダーシップとは何かを語りかけた。また災害だけでなく紛争等により現代の人道状況が第二次世界大戦時に匹敵するほど悪化していることに触れ、一人一人が良きリー

ダーとして継続的に問題解決に取り組むことが必要だと激励した。参加青年は小美野氏のお話や人柄に感銘を受け、リーダーシップに関する質問や自国の状況に関する相談など質疑応答は昼食交流会の間も続いていた。中には「原子力発電所の誘致を検討している自国に正しくリスクを伝え、その上で国民が是非を決断できるように働きかけたい」と早速実践への意気込みを語る参加青年もいた。

その後、池袋防災館を訪れた。震度7の地震体験では瞬時に机の下に身を隠す難しさを体感した。また日本独自の防災システムである緊急地震速報の仕組みは多くの参加青年の興味を引いていた。火災で煙が立ち込める現場の体験では、思った以上に腰をかがめて歩かなければならず、苦戦する参加青年が多かった。災害体験のほか、東日本大震災の実録映像を綴った防災教育動画も視聴し、地震の種類や発生メカニズム、付随して起きる津波・火災・液化化現象についても学んだ。災害の恐さを知り、身の引き締まる思いで施設を後にする参加青年の表情が印象的であった。

### 国際貢献活動コース

視察先：独立行政法人 国際協力機構 (JICA) / 公益財団法人オイスカ

JICA の中村貴弘氏及び元青年海外協力隊員の高橋文彦氏より、日本国政府が行っている国際協力事業について伺うとともに、公益財団法人オイスカの菅原弘誠氏より非政府組織として世界各地で行っている取組についてお話していただくことで、異なる二つの視点から国際貢献についての幅広い知見を得ることができた。まず中村氏から政府開発援助を始めた JICA が担う役割を御説明いただき、なぜ日本政府がこれほど熱心に国際協力に取り組むのか、国としての国際貢献の意義や重要性について理解を深めた。続いて高橋氏からは、ウガンダ共和国の野生生物教育センターで行ったゾウの飼育指導の活動の経験について御紹介いただいた。ウガンダでは密猟や農地開拓のために多くの野生動物が犠牲となっており、保全活動に欠かせない知識や技術とともにその重

要性をウガンダの人々に広く訴えていくことが欠かせない、という言葉に多くの参加青年が頷いていた。また菅原氏からはオイスカの農村開発事業や環境保全活動について、御自身のフィジーでの経験も踏まえながらお話していただいた。農業を通じた人材育成と国作りを目指し、地域住民を主役として彼らの声に耳を傾けながら、次の世代へも配慮したオイスカの実践的な活動は非常に印象的であった。後半の質疑応答では講演者との活発な意見交換がされた。参加青年からは被援助国の情勢が JICA 及びオイスカの取組にどのように影響するのか、また活動資金源の違いから活動にどのような難しさがあるかといった質問がなされ、双方の違いをより良く認識しようとする積極的な姿勢が見られた。また「世界青年の船」事業の既参加青年である中村氏に対して、同事業の経験

が開発業界で働く上でどのように役に立っているかという質問があり、この事業からの学びを参加青年自身の今

後のキャリアにつなげようとする意欲的な構えも見られた。

### 責任あるツーリズムコース

視察先：特定非営利活動法人 パルシック (PARCIC)

参加青年は今回の講演会場である「パクチャーハウス東京」を訪れ最初にランチを頂いた。「パクチャーハウス東京」は第10回「世界青年の船」事業既参加青年の佐谷恭氏が経営するレストランであり、最初に佐谷氏からレストランと料理について紹介があった。

ランチの後、基調講演者のPARCICの西森光子氏より、当団体の活動や方針、そして「責任あるツーリズム」に関する講演があった。

PARCIC (パルシック) は、1973年に設立された特定非営利活動法人アジア太平洋資料センター (通称PARC: パルク) から、2008年、地球上の人と人が相互に助け合う「民際協力」や「フェアトレード」の二分野に注力する組織として設立された。

PARCICの活動については、東ティモール、スリランカ、マレーシア、東日本大震災被災地、そして中東における様々な活動が、いかに地域との共存、持続可能性、そして公正な関係に基づいているかが紹介された。一方、外国参加青年からは日本での地方プログラムやホームス

テイでの経験が共有された。

「責任あるツーリズム」という題材に対しては、ツーリズムの良い側面と悪い側面として、モルディブ、マレーシアから問題のある事例、同じくマレーシア、ヨーロッパ、日本、そしてベツレヘムからは良い事例が紹介された。例えば、悪い事例としては、現地の人と関わらず現地にお金が落ちていない点などが紹介された。事例紹介後に青年たちはグループを作り、「責任あるツーリズム」を実行するために何が必要かということに関して議論を交わした。

各グループから質疑応答と討論結果の共有があり、セッションは終了した。参加青年から提起された主な点は次の四つである。

- 地元の人々と文化を敬うこと。
- 地元の人々に積極的に関わること。
- 「責任あるツーリズム」に関する教育をする。
- 自分の旅が価値を与えるのか、それとも奪い去るのかということ意識する。

### 青年のエンパワメントコース

視察先：一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト (GiFT)

GiFTの事務局長である辰野まどか氏に話を伺った。辰野氏は、GiFTを通じて「地球志民」の育成をする場作りを実践している人である。「地球志民」とは、GiFTのプログラムのコンセプトである。四つの要素①地「自己を知る、受け入れる」②球「相手を知る、受け入れる」③志「共に取り組み、共に創る」④民「社会に参画し、還元する」から成り、GiFTではこれらの循環によって「Global Citizenship (地球市民意識)」は育まれると考えている。現在は官公庁や教育機関等と幅広く連携してあらゆるプログラムを手掛けている。

今回の講義は、二つのワークショップ「自己紹介ワークショップ」「My GiFT Curve ワークショップ」を中心に行われた。「自己紹介ワークショップ」の狙いは、この場には実に様々な境遇の人が共存しているということの確認にあった。また、声を出さずに行うことによって①フェアさを実現し (自分の現時点での英語力を気にすることなく行えたという点において)、②集中力が高まり、③表現への意欲も高まったように見えた。GiFTの理念の実現とエンパワメント (本コースの目指すところ)

の実践が垣間見えた瞬間だった。

「My GiFT Curve ワークショップ」の狙いは、「ストーリーを共有する」と「コメントをし合う」というプロセスを踏むことによって、互いの共通点と相違点を見付け出すことにあった。共通点の発見によって参加青年同士の結び付きは強まり、相違点の発見によって参加青年自身が多様性に気付かされるとともにインスパイアされたようだった。

GiFTの創設ストーリーを辰野氏から聞くことによって、組織が生まれ成長していく過程でのエンパワメントの一事例を知るとともに、GiFTの目指すところを意識した上でワークショップに臨むことができた。

辰野氏は、講義全体を通じて、多様性に気付き、多様性を大事にできる人に育てる場を身近に作っているというGiFTの活動への共感と賛同を求めるとともに、これから「世界青年の船」事業という「最適な」経験をする参加青年を前にして期待を込めて応援したいという気持ちを伝えているようでもあった。

## 3 コース別の活動と成果

### ダイバーシティ推進とインクルーシブ社会の実現コース

副題：多様性を理解しやすくて社会を共創するリーダーシップ

ファシリテーター：藤原 加代

参加青年：41名（日本参加青年22名、外国参加青年19名）

#### 1. 目的とねらい

##### コースの目的

個人レベルから地域社会、そして国家間にわたるグローバルレベルにおいて、お互いの違いからくる他者排斥や差別は未だになくならない。それが個人レベルから国家間レベルの葛藤や紛争にもつながっている。そのような中で、今後、グローバル社会で活躍するには、一人ひとりの背景を理解したうえで個性を尊重し、多様性や違いを豊かな資源として認識できる感性を養うことが必須である。本コースでは、民族・人種、性別・性自認・性的指向、文化、身体的属性（障害の有無を含む）による違いと多様性を理解したうえで、いかに誰もが対等な関係で関わり合える包括的な社会を自身の現場で築いていくかを学ぶ。そのうえで、多様なそれぞれの個性を尊重し、可能性が最大限に発揮されることを人々にアプローチできるリーダーシップの体得を目指す。

##### コースのねらい

ダイバーシティとインクルーシブ社会についての理解をするために、多様な参加者同士でのオープンな対話を通して、お互いの違い、内在化している（当たり前のこととして無意識化されている）認識を紐解き、グローバルレベルでの多様性に関する相互理解を深める。その多様性にある背景とそれぞれのニーズを学びあい、より包括的な社会とはどういうものか、包括的社会実現に向けて何が必要かを参加型のワークショップを通して、知識レベルのみならず、自分自身の実感として理解する。参加青年は、プログラム期間中の日常生活においても、自身と違う考えや背景を持つ人と積極的に関わり、少数派の声に耳を傾ける実践を積むことにより、そこから広がる可能性を体感する。同時にグローバルな視点を持ちつつ、自国における自身のコミュニティ（同級生、サークル、職場、地域社会など）で実践できる取り組みイメージを明確に持つ。

#### 2. 事前課題

##### 1. 5分間プレゼンテーションの準備

グループに分かれて、各グループ毎に以下から一つのテーマを選び、5分間のプレゼンテーションを準備する。

①障害者（聴覚障害）、②障害者（視覚障害）、③性の多様性（男女平等）、④性の多様性（セクシャルマイノリティ）、⑤民族問題、⑥人種問題

##### 2. 自己紹介

以下の内容について、自己紹介をメーリングリストに投稿

①名前、②ニックネーム（今回、仲間から呼んでほしい名前）、③出身国、④今回のSWYへの参加のきっかけと動機、⑤自分のことについてみんなに知っておいて欲しいこと

##### 3. エッセイ

以下の内容に関するエッセイを作成し、グループのメーリングリストに投稿する。

- 1) 自分のユニークさ（大多数のマジョリティーとは違うと思う点）とは何か。またそれによって嫌な思いをしたり苦勞した経験について
- 2) これまで自身が感じた多様性の中で、①自分が注目したいもの、②その課題、③今後の可能性について
- 3) あなたが考えるインクルーシブ社会とはどのようなものか、自分のコミュニティ（同級生、サークル、職場、地域社会などから一つ選択）を想定して述べる。その実現の際に阻害要因となるものと、必要とされることについて

3. 各セッションの概要

セッション 1: 多様性と包括性について	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ どんな多様性があるか、なぜ包括的な社会を目指すのかを明確にする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ オリエンテーション: コースで取り扱う内容の紹介</li> <li>■ ワークショップ: 自分を知る (自分が思う、自分は誰か、他人が見る自分とは誰か)</li> <li>■ ディスカッション: このグループにある多様性</li> <li>■ ディスカッション: 国籍、性別、身体、教育、階級などの視点から特権について考える</li> </ul>
このセッションの主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● より多様なチームがより高いパフォーマンスを発揮できる可能性があり、そもそも一人ひとりの存在そのものが唯一無二であり多様であるからこそ、その多様性を尊重する必要があるということをディスカッションを通して理解した。</li> <li>● マタリングマップというツールを使い、性別、性的指向、年齢、お金、宗教、人種、民族、家族、友人、環境など 22 の項目を自身にとって大切な順にマッピングをした。その後、その背景、つまりなぜある項目が自分にとってより大切で、それらをお互いに共有することにより、このグループにある多様性とその背景を学び合った。</li> <li>● プリビレッジウォークというアクティビティを通して、包括的社会を構築するに当たって、自身に与えられている特権に気がつく大切さを学んだ同時に、無意識的・意識的な他者排斥は、自身の特権に無自覚であることから生じることを学んだ。</li> </ul>	
セッション 2: 障害者: 自国における状況、課題	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 聴覚、視覚障害者についてそれぞれの難しさやニーズを理解する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ JAL への課題別視察の振り返り</li> <li>■ プレゼンテーション: 各国の事例共有 (フィジー、トンガ、カナダ、ウクライナ、日本)</li> <li>■ ディスカッション: どんなニーズがあり、どう協働できるかを考える</li> </ul>
このセッションの主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 課題別視察で訪問した JAL では、知的障がい者、外国人、女性の雇用についてディスカッションする機会を得た。その振り返りを通して、特に知的障がい者の雇用に関する各国の状況を共有しあった。</li> <li>● フィジー、トンガ、カナダ、ウクライナ、日本からのプレゼンテーションを通して、各国における視覚障害者、聴覚障害者に対するソーシャルサポートの違いを学んだ。</li> </ul>	
セッション 3: 性の多様性	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 男女平等の実現に向けて、各国の課題と取り組みを理解する</li> <li>■ 性的指向、性自認、身体の性、性の表現の仕方の違いについて学び、その多様性を認識する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ プレゼンテーション: 各国からの事例共有 (ブラジル、エジプト、インド、日本)</li> <li>■ ディスカッション: <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 男性らしさ、女性らしさ</li> <li>・ 各国における性的役割とその現状</li> </ul> </li> <li>■ ショートレクチャー&amp;ワークショップ: 性的指向、性自認、身体の性、性の表現の仕方の多様性</li> <li>■ ディスカッション: 異性愛主義と同性愛嫌悪</li> <li>■ レクチャー: 支援者 (アライ) になるために知っておくべきこと</li> </ul>
このセッションの主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 各国で起こっている男女不平等の現状を共有しあいながら、男性らしさ・女性らしさの概念が社会的に構築されたものであることを学んだ。</li> <li>● 性の多様性とは、LGBT で表されるレズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーだけではなく、性的指向、性自認、身体の性、性の表現の仕方の無限の組み合わせからなるグラデーションであることの理解を深めた。</li> <li>● 性的少数者が抱える難しさの根底に、異性愛や心と身体の性が一致していることが前提として成り立っている社会があることを学んだ。</li> <li>● アライと呼ばれる性的少数者のサポーターの概念を学び、具体的にどのように性的少数者が住みやすい社会を築く為にアライとして何ができるかを学んだ。</li> </ul>	

セッション 4：人種と民族、インクルーシブ社会とは	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 人種、民族に関する少数派と多数派に関する事例共有を通して、少数排斥の際に何が起きているかを学ぶ</li> <li>■ インクルーシブ社会とは何かを考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ プレゼンテーション：各国の事例共有（ニュージーランド、ケニア、コスタリカ、日本）</li> <li>■ ディスカッション：自国で起きている人種・民族問題背景、要因の分析</li> <li>■ ショートレクチャー：人種問題と人種問題の違いと問題の根源。社会を変えるために必要なこと</li> <li>■ アクティビティ：「自分にとってのインクルーシブ社会とは」というテーマでブレインストーミング</li> <li>■ ショートレクチャー：インクルーシブ社会に必要な要素</li> </ul>
このセッションの主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 各国からの事例共有を通して、人種問題の現状を知ると同時に、その根底にあるステレオタイプ、及びマイクロアグレッションの存在を学んだ。</li> <li>● 人種、民族の多様性が尊重される社会の実現に向けて、教育と法整備の重要性を学んだ。</li> <li>● 多様性を包括する社会に必要な要素が何かに関する知識を身に付けた。</li> </ul>	
セッション 5：包括的な社会に向けて	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 多様性を包括する理想的な社会の姿を描く</li> <li>■ インクルーシブ社会の実現に向けて具体的に何をするかを明確にする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ショートレクチャー：インクルーシブ社会を構築するために必要な要素</li> <li>■ アクティビティ&amp;ディスカッション：理想的なインクルーシブ社会とは</li> <li>■ ワークショップ：インクルーシブ社会を具体的に視覚化し表現する</li> <li>■ ディスカッション：それぞれが描くインクルーシブ社会をグループメンバーに共有する。その社会実現に向けた具体的なアクションステップを設定する</li> <li>■ シェアリングダイアログ：これまでの学びの振り返りと共有</li> </ul>
このセッションの主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 粘土を使った創作活動を通じて、自分の理想の包括社会を表現し互いに共有した。個人でのアクティビティ後、グループでそれぞれの考えを統合しながら一つの作品を一緒に作った。このプロセスを通じて違いを尊重しながら、共通する価値観を見つけていくことの大切さを学んだ。</li> <li>● インクルーシブ社会の実現に向けて小さいが具体的な行動を起こすことの大切さ学び、それぞれが自分のプランを考えた。</li> <li>● コースの総括として、参加者一人ひとりがこれまでの経験と学びを共有しあった。</li> </ul>	

#### 4. ファシリテーターのコメント

多様性とインクルーシブ社会というテーマの特性上、個人的かつセンシティブなトピックを取り扱う可能性があったため、最初のセッションではオープンなディスカッションをするうえで安心安全な場をつくることに注力した。具体的にはグラウンドルールを設定し、このコースで話されたことを本人の許可なしに外に持ち出さないこと、評価判断をしないことをファシリテーターからは強調した。セッションの合間には、2回の相互インタビューの課題を出すことによって、セッションの中では語りきれなかったことを語り合い、お互いをより深く知り合うためのツールとして参加者に活用してもらった。加えて、参加者の期待、及び興味関心が多岐にわたったため、それを補完するために寄港地活動準備と振り返りの隙間時間を活用して、「マーケットプレイス・ダイアログ」を実施した。これは参加者自身がダイバーシティとインクルージョンについて興味がある具体的なテーマを自分で出し、自分が興味があるトピックについて、興味がある者同士で集まり話し合うというものである。こ

れは公式プログラムの中で、時間が足りずに扱いきれなかった点を深掘りするものとして参加者の満足度は高いものだったと思われる。

41人という大きなグループで対話をするという難しさはあったものの、コース中は、参加者の率直な自己開示から、場全体がオープンなディスカッションに至る場面が度々見受けられた。その中でも、内在化しているステレオタイプと自分の特権に気が付くこと、及び※マイクロアグレッションに自覚的になることの大切さがインクルーシブ社会実現のためのポイントとして話し合われた。ファシリテーターからは、常に自身の現場でいかせそうな自分の学びを持ち帰ることを伝え、最後のセッションでは、具体的なアクションステップを各自作成し、その達成を報告しあう仕組みをつくることで行動を促した。

※マイクロアグレッション：ステレオタイプや偏見に基づく言動のうち、目に見えにくい、しかし受け手にダメージを与えるもの (Derald Wing Sue, 2010)



5. 参加青年の感想

サラ・ヴァマラシ（フィジー）

私にとってこのDIコースは様々なことに気付かせてくれ、目からウロコの連続だった。最初の導入のセッション以来、私は様々なバックグラウンドを持ち自分とは異なる意見を持つ41人のPYと一緒に学ぶことに少し不安を感じていた。しかし、このコースは非常に深い学びがあり、参加者をオープンマインドにしてくれる安全な空間だった。私たちの唯一のルールは“criticize ideas and not people.”「意見を批判しても人は批判しない」というもので、全てのセッションはこのルールに基づいて議論が行われた。ディスカッションはいつも活発で多様な意見に満ち溢れていた。参加者は皆、何らかの意見を持っていて、たとえ意見が異なっても自分の考えを口に出すことを恐れないその姿に感銘を受けた。このコースのメンバーは人の意見に機械的に流されたりすることなく、自分の意見を持って発言していたと思う。そもそも、私はこのコースのメンバー自体がトピックのダイバーシティ&インクルージョンを象徴していたように感じる。私たち一人一人が本当にダイバーシティにあふれていて、その環境の中でダイバーシティ、そしてそれをどう受け入れ世界を平和にできるか議論することができた。この船もまた小さな世界のように多くの国、そして異なる価値観が詰まっていた。課題別視察では私たちは日本、ニュージーランド、フィジーの事例について学

んだ。理論的なことを語る教室での学びから、より実践的な学びを与えてくれたこの視察はすばらしい経験だった。日本ではJALのダイバーシティ推進に関わる人や外国人、女性社員からお話を聞き、質問をする機会を与えてもらった。他にも障害者によって運営されている社員カフェの方々とお話をさせていただいた。ニュージーランドではASBというダイバーシティ推進に力を入れている銀行に伺った。そこでは様々な多様性を代表する方々にお会いし、彼らがいかに主体的に銀行のダイバーシティとインクルージョンの推進に取り組んでいるか学ばせていただいた。このコースでは課題別施設やPYによるプレゼンテーション以外にもインタビューやプリビレッジウォーク、プライオリティマッピング、粘土を使った創作など多くのアクティビティを行った。これらのアクティビティはいつも非常に面白く、他の人の考えやクリエイティビティについて知るの楽しかった。私は間違いなくこのコース、そして一人一人のPYから多くを学び、そして信頼できる仲間を作ることができた。ここでの障害、LGBT、人種差別、エスニシティ、そしてジェンダーといった多様性についての学びは必ず国に帰ってから自分のコミュニティに還元したいと思う。このコースディスカッションはこの船でいつも楽しみにしていたものであり、これからもまた受けたくなるものだった。私は今、自分で声をあげることでできないマイノリティの人たちの手助けをすることに情熱を感じている。彼らをサポートし、そして彼らのために声を上げていきたい。

平和構築のための対話型アプローチコース

副題：「対話」とは大小様々な対立回避の手段としてどれくらい・どのように有効なのか？

ファシリテーター：野田 百合子

参加青年：39名（日本参加青年16名、外国参加青年23名）

1. 目的とねらい

コースの目的

世界は大小様々なコンフリクトにあふれている。それらコンフリクトには、国家や民族など大きな集団間で起こる武力を伴う紛争から、日常生活の中で誰もが経験する個人間の衝突や対立まで様々なレベルがあるが、誤解を怖れずにいえば、どんなコンフリクトでもそれらを分解していくと結局は個人あるいはグループ間での対話が解消の鍵になるという結論に行き着くのではないだろうか。水面から顔を出した二つの氷山のように、一見AとBという二つの主張が相反するようになって見えても、対話を通してその主張の背景や理由、各々のニーズを互いに理解していくと、実は海底でつながっている氷山のごとく両者のニーズを満たす共通の地平が現れる。そうなればAでもBでもない、しかし両者が満足できるCという

新たな選択肢を考え出すことが可能になるのである。このように対話はコンフリクトを平和的かつ創造的に解消する手段として有効である。

また人が安心できる環境で心から話し、それを相手がかしかりと聴いて受けとめることができたときに豊かな対話の実現する。多くの場合、聴き手は話し手が心を開いて話してくれたことをうれしく感じ、自分もさらに心を開いて話したくなるため、そのような対話はキャッチボールのようにしばらく持続する。そしてそこではあらかじめ考えていたことをやりとりするのではなく、相手の反応や受けとめ方によって次の発話が生まれるため、今ここにしかない豊かな化学反応が実現する。目の前の相手と今ここにしか生まれ得なかった豊かな時間を共有することで、人は生きている喜びを感じ、エンパワーされるのである。

以上のことを踏まえ、本コースで参加青年はまずはコンフリクトを解消する手段として「対話」がもつ可能性を体験によって探求し、そのために重要なことを理解し、いくつかのスキルを身に付ける。そうすることで、今後参加青年が身を置く世界の様々な場所における大小様々なコンフリクトの場面で、対話によるコンフリクトの解消を成立させるキーパーソンとしての役割を果たせるようになる。

またコースにおいて、参加青年は将来繰り返し立ち返ることができる「豊かな対話の原体験」を得る。そのことによって参加青年自身がエンパワーされ、さらにそのような対話を別の場面でも作り他者をエンパワーしていくことができるようになることを目指す。

### コースのねらい

本コースでは学習手法として一貫して体験学習を用いる。すなわちファシリテーターからの講義の部分は極力少なくし、参加青年がコース中あるいは船内での様々な場面における自らの体験や実践から得られる学びを重視する。またコースで扱う対話には、言葉による対話のみならず様々な種類の対話も含めることとする。

参加青年は、まずは対話を成立させるのに必要な「安全な環境」を作ることの重要性及びそのためのいくつかの手法を学ぶ。そしてそのことにより、将来必要なときに自ら「安全な環境」を作れるようになることを目指す。なおこの「安全な環境」には、英語で大勢の前で発言するのを不得意とする参加青年たちが安心して発言できるような環境という意味合いも含まれる。

また人と人が集まればコンフリクトは当たり前が存在するものであり、コンフリクトを単に避けるのではなく、自分の思いを伝え違いを乗り越えることで深い対話や一生大事にしたいと思えるような関係が築けることにつながるということを理解する。そしてそれにより、今後は少しずつでもコンフリクトに直面してそれを乗り越えていけるようになることを目指す。

さらに、人と立場や意見が違うときに相手の立場に立ってみることの大切さを実感し、今後様々な場面で相手の立場に立って考えられるようになったり、相互理解のために効果的な態度や質問ができるようにする。

そして本コースで将来繰り返し立ち返ることができる「豊かな対話の原体験」を得ることで、対話の可能性を実感し、そのような対話を別の場面でも作り他者をエンパワーしていけるようになることを目指す。

## 2. 事前課題

### 2-1. 日本参加青年のみの事前課題

「全参加青年向け課題」に関連し、日本語を母語とする参加者は以下三つの文書を、それぞれ指定される期日までに、コースのメーリングリスト (swy2016-DP@googlegroups.com) に添付して提出すること。

- ① 「2-2. 日本参加青年・外国参加青年共通の事前課題」を日本語で書いたもの (10月中)
- ② ①を自らの英語で書いたもの (10月中)
- ③ 自らの現時点での「国際コミュニケーション力」の現状分析と、今回のコースの中で「心がけたいこと・こだわりたい姿勢・果たすことに努めたい役割」について日本語でまとめたもの (A4で1～3枚程度、11月中)

### 2-2. 日本参加青年・外国参加青年共通の事前課題

以下の問いについてそれぞれの考えを英語でまとめ、指定された期日までに、コースのメーリングリストに提出すること。必要に応じて、写真の添付、動画リンク等を添えてもよい。

- ① 「コミュニケーションにおける対話型アプローチ」というものの有効性と難しさについて、あなたの考えや経験をシェアしてください。あなたはどのようなときに「対話」という行為の持つ力や可能性、「希望」を感じ、またはその限界や難しさ、「無力」を感じるでしょうか。また「コミュニケーション」というものを考えるに当たってあなたが有しているかもしれない特定の 이슈への関心や思い、ポリシー、葛藤などについて書き加えたいことがあれば自由に記述してください (A4紙1～4枚程度)。
- ② あなたの出身地やこれまで歩んできたフィールドに関連する、「平和構築と対話」についての議論を深めるための良い事例や体験、考察等を持っていただければぜひ紹介してください。あるいはこのコースで特に考えを深めてみたいテーマ、皆に相談してみたい「対話的コミュニケーション」に関するトピックあるいはテーマを持っている場合、グループディスカッショントピックの参考にしますので書き加えてください (②は特に書きたいことを持っている人のみを対象とする。分量はA4一枚～自由)。
- ③ あなたという人物について教えてください (形式自由)。どこでどのように生きてきたのか、これからどのようなことをやってみたいと思っているのか。どういうことを愛していて、どういうことが好きではないのか。本事業にどのような気持ちで参加しているのか。5回のセッションの中で一人が全員を前に話すことのできる時間は限られています。皆があなたをより良く知るための良き手がかりがあれば、この機会に文書その他の形でヒントを示しておいてください。特に英語でのコミュニケーション、大勢の人前で話すことに慣れていない人は、この機会をぜひ有効に使ってください (A4紙1～2枚程度を目安)。

3. 各セッションの概要

セッション 1: コースの土台作り	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ このコースが参加青年にとって安全な場になるよう基礎を築く</li> <li>■ 参加青年がお互いにどんな人たちなのか分かり、たとえば不安を抱えているのは自分だけではないとわかる</li> <li>■ このコースで大事にしたいことを互いに共有し、次回以降で参加青年が安心して話しやすい雰囲気を作る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ イントロダクション</li> <li>■ 参加青年の自己紹介（職業、好きなこと、コースへの期待、コースに貢献できることを絵に描いて発表する）</li> <li>■ 参加者青年の現在地（いくつかの質問に答え、似たような答えをした人と短く話し合う）</li> <li>■ このコースで心がけたいこと（Dos and Don'ts）を小グループで話し合い、全体で共有、合意する</li> </ul>
このセッションの主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 楽しくインタラクティブな絵を描きそれを用いながら、各青年が自分の経験、期待、そしてこのコースを選択した理由を共有した。絵をコミュニケーションの手段として用いることで、参加青年は対話が言葉だけで完成するものではないと学んだ。対話はイメージ描写を含む様々な形態を持つのである。</li> <li>● コース全体を通して各青年が守りたいと考えるルールと指針のリストをみんなで作成した。これらすべてのルールは青年たちが自由に表現し有意義な対話を行えるような安全な環境を作るために、相手への敬意や誠実さ、サポートといったテーマを軸として作成された。</li> </ul>	
セッション 2: 豊かな共通の体験について思いっきり語る	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 課題別視察で訪れた「カタリバ」という豊かな素材を題材に、参加青年が自分の感じたこと、考えたことを小グループで表現する体験をする</li> <li>■ 同じものを見ても様々な感じ方があったことから、ディスカッションを通して互いの違いが表現されるようにする</li> <li>■ 違いがある中で、話し合いをして一つのものを作る体験をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ お互いの名前をおぼえるアクティビティ</li> <li>■ 「カタリバ」で感じたこと考えたことを小グループで共有し、その後それを全体で共有する</li> <li>■ 「カタリバ」の対象である日本の高校生、あるいは自国の高校生に対して「対話」のプログラムをデザインする</li> </ul>
このセッションの主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 課題別視察先である「カタリバ」での口頭でのプレゼンテーションと小グループでの活動を通し、参加青年は平和の構築、また自信を高め、自身の心を開くためには効果的な対話を使用できるということを学んだ。</li> <li>● 参加青年は「カタリバ」訪問の後、有意義な対話をもつに当たり、自分への自信と自分に価値があると思えることが果たす役割についての経験と学びを振り返った。</li> <li>● また五つのグループに分かれ、「カタリバ」への課題別視察での気付きをもとに新しいプログラムを考案した。そしてその過程で、チームワーク、互いへのサポート、プロジェクトの成功には言葉による効果的な対話が欠かせないことを学んだ。</li> </ul>	
セッション 3: グループデベロップメントモデルとコンフリクト	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ グループができてから解散するまでに通りうる五つのステージ（グループデベロップメントモデル）を理解する</li> <li>■ 人に対して自分の中で違和感をおぼえたときやコンフリクトが起きたときに、それを単に避けるのではなく、自分の思いを伝え違いを乗り越えていくことで深い対話ができたり、一生大事にしたいと思えるような関係が築けることにつながるを理解する</li> <li>■ ロールプレイを通して相手の立場に立って考えたり、物事を様々な方向からとらえる体験をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ SWY でのここまで体験を振り返る</li> <li>■ Tuckman の「Stages of Group Development」を自分の経験に照らしながら理解し、SWY では今自分たちがどのステージにあるかを考える。また SWY での人間関係の現状や、自分がこれまでコンフリクトにどう対処してきたかを振り返る</li> <li>■ この数週間に船内で起こった小さなコンフリクトのロールプレイをし、その役になりきって問題を解決しようと試みる</li> </ul>

このセッションの主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 様々なロールプレイのシナリオを用い、参加青年は平和的対話をもち、うまく問題解決に結びつけるための様々なコミュニケーションのストラテジーとテクニックを学んだ。</li> <li>● ロールプレイの後参加青年は、一対一のコンフリクトの場合には相手に共感することの重要性と、平和的対話と解決を実現するためには相手の視点への理解が重要な理由を振り返った。</li> </ul>	
セッション 4：一対一で関係を築く、一対一で難しい問題について議論する	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 2人一組になってパートナー（エンジェル）との関係を深め、まずは一対一で良質の対話ができるようにする</li> <li>■ ロールプレイを通して、自分の見えている現実のほかにも相手の現実があることに気づき、相互理解のもとに解決策を見つける体験をする</li> <li>■ まずは一対一で、その後小グループで難しい問題について議論する体験をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ エンジェル同士で関係を深めるミニアクティビティを4種類ほど実施する</li> <li>■ 「Frenemies Project」というロールプレイをし、その後学びを共有しあう。なおこれはアメリカのバージニア工科大学の Todd Schenk 氏が 2016 年のアメリカ大統領選前後に分断されるアメリカに危機感を抱いて開発した移民問題についてのロールプレイである。</li> </ul>
このセッションの主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 対話に関するいくつかのアクティビティをした後、参加青年は相手との信頼とつながりがいかに重要であるかを学んだ。相手との信頼とつながりが築かれることで、言葉を交わして価値のある対話をするための心の準備ができ、自分により自信がもてるようになるということである。</li> <li>● 参加青年は移民問題について賛成と反対の立場に分かれてロールプレイを体験した。この経験を通して、参加青年は相手に共感すること、また相手の立場を正確に理解することと同様に自身の意見を誠実に表現することがいかに重要かを学んだ。</li> <li>● また参加青年は他者の意見に対し、受容的で、敬意を示し、心を開くことが重要であると学んだ。心を開くことによって、多くの青年が開始前とは異なる、移民に対する新しい観点を心得て演習を終えた。</li> <li>● 振り返りの後、青年は対立の中間で平和的対話を導き、仲介する役割（ミディエーター）がいかに重要であることを認識した。それはとくに、自分の意見を曲げず対立する当事者がいる際に効果的である。</li> </ul>	
セッション 5：豊かな対話の体験	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 豊かな対話の場を体験する（心から話す体験、それを聴いて受けとめる体験）</li> <li>■ 対話にまつわる経験や対話を学びたかった理由（過去）、コースで得たもの（現在）、コースで得た学びをどのようにいかしたいか（未来）について共有する</li> <li>■ 感謝と一体感をもってコースを終える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 事前に参加青年に今回の対話のテーマを伝え、まずは一人で自分が話したいことを準備する。そしてそれをあらかじめエンジェルに聴いてもらって、セッション時にはより大勢の前で話せるよう心の準備をしてくる</li> <li>■ 参加青年がみんなの前で一人ずつ、テーマについて話したいことを話したい順番で話し、そのほかの人は質問やコメントをせずに静かに聴いて受けとめる</li> <li>■ このコースの中でお互いに感謝していることを共有する</li> </ul>
このセッションの主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● セッションの最後のまとめとして、参加青年は人の考えや心を動かす対話の力や可能性を体感した。</li> <li>● 参加青年は対話が効果的にファシリテートされ相手に伝わったときに対話をもつ言語、人種、ジェンダー、性別の違いを乗り越える力と共に、対話をもつ計り知れぬ可能性を理解することができた。</li> </ul>	

#### 4. ファシリテーターのコメント

長い旅のようなコースだった。このたとえばなぜか船ではなく飛行機なのだが、第一回のセッションでファシリテーターと参加青年を乗せた飛行機はこの先どこへ行くのかははっきりと見えないまま離陸し、その後上下左右に大きく揺れながら飛行したが、最後には無事にみんなを着陸できたと思う。参加青年たちは、各々のタイミング、各々の仕方、「コンフリクトを解消する手段としての対話の可能性」を実感したし、ほぼ全員が「将来繰り返

返し立ち返ることのできる豊かな対話の原体験」を得ることができたのではないかな。

コースの前半には、方向性が見えなくて戸惑うという声をいくつも聞いた。この時期は、お互いを知る、安全な環境を作るなどコースの土台作りをするとともに、参加青年たちのあまりにも多様な対話についての経験や期待、英語力や発言力、話したい内容と話せる内容のギャップを前に、いかに足並みをそろえて同じ土台で話ができるようにするかに尽力した。

東京の課題別視察で「カタリバ」を訪れることができたのは幸運だった。日本の高校生に対する豊かな対話の事例を垣間見、また彼らの自己肯定感の低さを知って多くの参加青年が驚いた。この多様な見方、感じ方が表れる共通体験を題材にディスカッションを行うと、何人も参加青年があふれるように言葉を紡ぎ出した。

第三回のセッションの前にはインフルエンザの第一次流行が起こり、数日間プログラムが変更されキャビンを中心とする生活が続いた。にもかかわらず、多くの参加青年は「いい子」のままコンフリクトを避けてやり過ごしているようだった。そしてプログラムも中盤に差し掛かり、なんとなく日常を過ごしているけれど、このままではほしかった強い絆や友情は得られないのではないかと不安に思う声も聞かれた。そこで第三回のセッションではコンフリクトを扱い、コンフリクトは当たり前が存在するものであり、そこを乗り越えることで深い対話や一生大事にしたいと思えるような関係が築けることにつながると体験から学べるアクティビティを実施した。激しい揺れの中、暑い7階でのセッションで、もう少しテンポよくやればよかったと思うものの、何人かの参加青年には強い印象を残したようだった。また逆に主に日本人参加青年にとっては消化不良の部分を残したようで、その後日本人だけで日本語で今までのコースを振り返り今後につなげるための自主セッションを持つ動機にもつながった。

コース委員会メンバーと行っていた毎回のコース後の振り返りや次回のプランニングと共に、この自主セッションはコースの流れを変える大きな契機となったように思う。今までの体験から、「こんな対話をもっとしたい」と思えるような瞬間にはどんなことが起きていたかを振り返り、「この人たちになら言っても大丈夫、聴いてほしいなと思えた」「お互いに助け合える、自分を出せる感じ」が鍵になるということがわかった。また日本人同士の間でも話したことの無い人もいと気づき、お互いを知ることから始めようということになった。そこで参加青年から出されたアイデアが、二人一組でバディを作って（その後アドバイザー三好先生のアイデアを拝借してエンジェルに改名）、二人で話す機会や様々なミニアクティビティを持つことで、まずは一対一で関係性を築くことに注力することにした。組み合わせはその後自分たちでランダムに決めたものだったが、このエンジェルシステムは多くの参加青年にとって「ホーム」となりうる安全な環境を提供することに大きく貢献した。ファシリテーターにとっての発見は、日本人外国人を問わず人は大勢の前で話すには勇気が必要とするが、まずは一人にじっくり聴いてもらうことができると安心して次は小グループで話せるようになり、その後はコースのメンバー全体に対してや、さらに時と場合によっては240人の前でも話せるようになるのだということだった。

そして一人の前で心から話しができたとき、それをじっくり聴いて受けとめることができたときには豊かな対話生まれ、両者にとって喜びの瞬間を味わうことができるのだった。

ニュージーランドでの課題別視察は大変パワフルな体験だった。大きく分けて三つのプレゼンテーションにはどれも新しい発見と学びにあふれていた。中でもファシリテーターにとって印象に残ったのは、訪問先の学校が実践している「ピア・ミディエーション」という仕組みとその効果だった。学校内にはいじめやコンフリクトがたくさん存在するが、生徒の中から志願者を選抜、トレーニングしてミディエーターを育て、彼らが仲間のコンフリクトのミディエーションを行うのだ。実際に接した高校生のミディエーターや卒業生の話から、これは学内のコンフリクトを解消するだけでなく、ミディエーター本人を人間的にも育て、卒業後もずっと本人や周囲の人たちを助けるスキルと経験を与えているのだとわかった。日本の学校で生徒たちは「もめごとを起さず和を保て」と言われて育ち、いじめなどの問題は先生が解決すべきと思われる。しかし生徒にコンフリクトに向き合って平和的かつ創造的に解消していく方法をおしえることこそ、本人や周囲の人たちを生涯にわたり本当の意味で助けることになるのではないだろうか。このときの課題別視察振り返りでは、多くの参加青年が興奮冷めやらず活発にディスカッションしていた。また何人も参加青年が思い切って全体の前で発表し、聴き手もそれを受けとめることができた幸せな時間でもあった。

第4回のセッションでは、いくつかのアクティビティによりエンジェルとの関係をさらに深めることができた。また移民問題のロールプレイを通して、一つの問題の背景にはそれぞれ切実な当事者がおり、立ち位置によって見える景色が変わってくるということを実感したのではないか。今までなかなか取り扱うことのできなかつた難しい問題について思い切りディスカッションができたのも良かったようだ。

第5回のセッションの前には、最後のセッションをどのように使いたい参加青年同士で話し合う時間を設けた。個々がアイデアを出し合い、投票の結果、対話とこのコースにまつわる過去現在未来について全体の前で各々が自由に話せる時間を持つことになった。ファシリテーターはそのほかにも最後のセッションにふさわしいと考えるアクティビティをいくつか用意していたが、ボランティアのプランニンググループと話しているうちに、参加青年たちの「アクティビティなどどうでもいい。私たちはただひたすらに心を共有する対話の時間を持ちたいのだ」という思いが伝わり、用意したアクティビティをとりやめ、心を開いて大きな流れに身をゆだねることにした。実際もそのとおりに多くの参加青年が心から話し、聴き手は心から受けとめ合うすばらしい対話の時間

が持てたと思う。時間が足りず、自分も含め全員が話すことができなかつたのが残念だったが、そこで共有した時間はかけがえのないものとなった。

思えばこのコースは参加青年たちと走りながら、いや飛びながら共に作っていったコースだった。たくさんの人の思いや大小様々なダイナミクスに身をゆだね、対話を味わい尽くし、最後にはみんなで無事に着陸できたことを本当にうれしく思う。私の考える究極のファシリテーターは透明な存在になることだ。私の代わりに参加青年たちがそれぞれのタイミングでリーダーシップを発揮し、セッションやサマリーフォーラムを作りあげていった体験からさらに多くを学ぶことができれば、それは私の喜びでもある（何しろラーニングピラミッドの一番下、一番効果的な学びは人におしえることで得られるのだから）。私にとっても初めてのSWY。次に何が起こるのかわからないままの空の旅には不安をおぼえたり、透明になろうとするあまり私という人あるいは私の考えていることがとらえきれずに混乱したこともあったかもしれない。自己開示がまだまだ苦手な私にとって、大事なみんなの時間を使ってまで自分のことを話すタイミングをうまくつかむことができずそれは少し反省している。またファシリテーターとして、本当の意味でオープンマインドでいること、変化や自分が築き上げてきたものが壊されることを怖れないことの大切さと可能性をみんなからおそわった。私にとってもかけがえのない旅だった。このような機会を与え、支援してくれた全ての人に感謝したい。

## 5. 参加青年の感想

原口宣彦（日本）

正直なところ、初めはこのコースディスカッションに対して良い印象を持っていませんでした。なぜならば、まず第一希望のコースではなかったため、そしてファシリテーターが突然変わってしまったためです。また最初の数回のセッションではゴール設定がはっきりしておらず、自分のみならずほとんどの人がコースディスカッションに対して価値を見いだせていないようにみえました。しかし、委員会の献身的な協力のおかげで舵を取り戻したように思います。小グループでのディスカッションやロールプレイでコンフリクトについて深く考え、また実生活における対話の問題を解決する練習をすること

ができました。それらは私が正にこのコースに期待していたことでした。

このコースのタイトルは「平和構築のための対話型アプローチ」ですが、私が一番学んだことは、平和構築の一番の近道はお互いをよく知ることではないかということです。もちろん対話も平和構築の重要な一手段ですが、時には効果を発揮しない局面もあります。しかしこのコースを通して、深くお互いを理解することによって、たとえそこに言葉がなくても、対話がなくても、何も表現しなかったとしても、平和構築は実現するのではと感じました。最後に、このコースで良かったと思える瞬間を感じさせてくれた全てのメンバーに感謝します。

パニア・ベタ・ニュートン（ニュージーランド）

初めはこのコースディスカッショングループがどうなるのか不安でいっぱいでした。なぜなら多くのメンバーがこれが一体どんなコースなのか理解に苦しんでいたからです。しかし、セッションとそれぞれの寄港地で課題別視察を重ねていくうちにこのコースが次第に良くなっていくのを感じ、安心しました。私にとっての一番の学びは、ファシリテーターからコンフリクトはあってもいいという考えを得たことです。今まではコンフリクトを平和的に解決する方法をなかなか掴めず、コンフリクトをなるべく避けていました。けれどもこのコースで学んでからは、対話を通した平和構築のスキルと知識を身につけて成長できたのではないかと思います。とくに、ニュージーランドの平和財団によって共有されたリソースや情報を利用し、ミディエーションを通してコンフリクトを解消し平和を構築するスキルを学びました。これに加えて、南太平洋大学で学んだコンフリクトを解消するための伝統的な手法の知識は、私の国にも適用できると思えました。最終セッションで、私は次世代の世界のリーダーであるこのコースの仲間たちに、対話とミディエーションを通してコンフリクトを解消し未来に平和を構築する手段として考えてほしいという願いを伝えました。私は今、世界にあるコンフリクトのほとんど全ては対話と本当の意味での「人間性」を理解することで解決につながると心から信じています。このコースの準備に関わってくださった全ての方に感謝します。とくにファシリテーターには、コースをファシリテートして私たちに自分の気持ちや考えを共有する場を与えてくださったことに感謝しています。ありがとうございました。

## 防災活動のための人材育成コース

### 副題：グローバルな連携の持つ力ー防災力を高める協働

ファシリテーター：芳賀朝子

参加青年：37名（日本参加青年19名、外国参加青年18名）

#### 1. 目的とねらい

##### コースの目的

防災は持続的な発展を達成する上でカギとなるコンセプトであり、地域レベル・国家レベルのみならず、国連レベル・地球レベルで非常に重要である。政府の役割が不可欠である一方で、国家による活動や能力を補完する必要性は恒常的に存在しており、社会全体による参加と連携が求められている。このような文脈において、いかにして市民は防災力を高めるためのリーダーシップを発揮することができるだろうか。

本コースでは、防災の視点をきっかけに、参加青年がリーダーシップを発揮して社会に働きかけることができる人材になることを目的とする。

##### コースのねらい

あなた自身がどの組織・レベルに属して活動するとしても、防災の取組に必要とされるリーダーシップには、明快なビジョン、計画、能力、所属するセクター内や他セクターとの間におけるガイダンスや連携、及び関係者との協働という要素が含まれる。そこで本コースでは、市民社会組織（Civil Society Organization =CSO）による様々な防災活動事例に基づいたディスカッションを通して、災害の定義、防災を担うセクターとそれぞれの視点、多様な関係者の参加と連携、人道支援の質と組織の説明責任、支援活動の終了基準、ステークホルダーの自発性を高めるコミュニケーションの要素などを学習し、実践につなげる。

#### 2. 事前課題

##### 2-1. プレゼンテーションの準備

自分自身がこれまでに参加した（もしくは関心のある）身近な防災の取組について、下記の要領でポスター形式のプレゼンテーション資料を作成する。

- ポスターに盛り込む内容として、氏名、出身国名、自国もしくは居住地域における主な災害の概要、身近な防災プロジェクト、その目的、内容、活動主体、社会的ニーズ、鍵となる要素、実施に当たって必要な資源（資金・人的資源・物的資源を含む）、対象、期間、成果、社会にとっての利益、評判、自身の見解などを含むこと。
- 仕様はA4 1枚とする。文章だけでなく、写真やイラストなどを効果的に盛り込むこと。作成に当たってはパソコンあるいは手書きどちらでも良いが、必ずPDF形式のファイルにして2016年12月31日までにコース・ディスカッションのメーリングリストを通じてファシリテーターまで提出すること。なお、原本はコース中にも使うため、紙媒体の形で1部持参すること。

##### 2-2. エッセイを書く

自分自身が将来運営したい防災活動について、下記の要領で短いエッセイにまとめる。

- i) 氏名、出身国名
- ii) 自身が将来取り組みたいと思う災害リスク一つと、その背景
- iii) そのリスクに関心を持っている理由
- iv) そのリスクが低減された理想の状態
- v) あなた自身の活動プラン

- 仕様はA4 1枚（400～800ワード）、英文、Word形式で作成・保存することとする（手書きは避けること）。2016年12月31日までにコース・ディスカッションのメーリングリストを通じてファシリテーターまで提出すること。なお、原本はコース中にも使うため、紙媒体の形で1部持参すること。

### 3. 各セッションの概要

セッション 1: 災害リスクについて理解する	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 世界の災害リスクについて互いから学ぶ</li> <li>■ 「災害」の定義や防災活動の意義について考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ プレゼンテーション: 参加青年は事前課題で準備した事例を2人一組のグループで発表しあった。プレゼンテーションには以下の情報が含まれた。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 自国もしくは居住地域における主な災害の概要</li> <li>• 身近な防災プロジェクトの事例、及びその目的</li> <li>• 防災プロジェクトの活動主体</li> <li>• 社会的ニーズ</li> <li>• 鍵となる要素</li> <li>• 資源(資金・人的資源・物的資源を含む)</li> <li>• 対象</li> <li>• 期間</li> <li>• 成果</li> <li>• 社会にとっての利益</li> <li>• 評判</li> <li>• 自身の見解など</li> </ul> </li> <li>■ グループディスカッション: 参加青年は災害の定義とその主な特徴について小グループ毎に話し合った。さらに結論をコース全員で共有し、災害を定義する上での共通見解を得た。その後、各グループでの結論を国連国際防災戦略事務局 (UNISDR) による定義と照らし合わせた。</li> </ul>
このセッションの主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 災害とは何か?</li> <li>● なぜ防災について話し合うのか?</li> <li>● 災害リスクにはどのような種類があるか、また、それらに対してどのように備えるか?</li> </ul> <p>このセッションでは、災害とは何か、また世界の災害リスクにおける様々な種類とその特徴について理解を深めた。グループ毎に協力しながら作業を進めたことで、参加青年同士が生産的に共同作業できる関係性ができ、さらに公平で平等な学びの環境で意見を交換できるようになった。</p>	
セッション 2: 防災を担うセクターと、それぞれの視点	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 防災活動を担う組織の形態、及び様々なセクター間における効果的な連携について理解する</li> <li>■ 防災活動をめぐって対立しやすい視点について考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 講義: CSOの形態、及び多様なステークホルダーとの防災活動における効果的な連携について。なかでもCSO・企業・行政という三つの主なセクターについて中心的に扱われた。</li> <li>■ グループディスカッション: 参加青年はグループに分かれて、東日本大震災を題材とした以下のケーススタディーに取り組んだ。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 災害後における被災者のニーズと、それに対応する支援者の思い</li> <li>• CSOが企業からの支援・資金提供を受けるに当たっての課題</li> <li>• 危険を伴う活動にボランティアを派遣する前にCSOが検討すべきこと(例: 福島原発事故後の支援)</li> </ul> </li> </ul>
このセッションの主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 防災における活動主体とステークホルダーは誰か?</li> </ul> <p>このセッションでは主に、防災の重要な担い手とは誰かという点を扱った。参加青年は、異なるセクターにおけるそれぞれの活動主体とステークホルダーについて学んだほか、近年の災害で見られた諸課題について、知恵を出し合いながら深く分析することができた。</p>	



セッション 3：多様な関係者の参加と連携	
目的とねらい	活動の内容
<p>■ 防災・減災対策の意思決定プロセスに多様な関係者を巻き込む必要性について考える</p>	<p>■ 講義：多様な関係者を巻き込みながらコミュニティの防災力を高めるには、どうしたらよいか？</p> <p>■ ワークショップ：SWYの洋上生活を基にしたシナリオを使用し、コミュニティを基礎としたハザードマップ演習を実施。</p> <p>■ 災害図上訓練（災害想像ゲーム DIG）の実施に当たり、参加青年には SWYでの体験に基づいたシナリオが与えられた。「SWY 島」に地震と津波が発生、4階まで津波が到達、住民が緊急支援を受けられるまでに3日間を要し、全ての緊急アナウンスは日本語で伝達される、という内容である。参加青年は、配布された船のフロアマップを用い、危険個所、集合場所、活用しうる資源などを図上で特定するハザードマップを作成した。</p>
このセッションの主な学びと成果	
<p>● コミュニティを基礎としたハザードマップはどのように作成するか、また誰を想定すべきか</p> <p>● コミュニティ主体の防災・減災策は、どのように立案できるか</p> <p>このセッションで参加青年は、実践的な演習に参加する機会を得て、楽しみながら学ぶことができた。演習はにっぽん丸に参加青年のコミュニティに見立てたシミュレーション形式で行われた。DIG は使い勝手の良い演習ツールであり、リスクに対する社会認識を喚起するのみならず、コミュニティの様々な関係者を防災・減災策の意思決定プロセスに巻き込む方法として適していることに気付くことができた。多くの参加青年が、この演習は低コストで実施できる上に学びの多い教育ツールであり、各自のコミュニティを持ち帰って導入できると実感した。</p>	
セッション 4：人道支援の質と組織の説明責任 / 支援活動の終了基準	
目的とねらい	活動の内容
<p>■ 人道支援の質と、寄付者及び受益者に対する人道支援者の説明責任について学ぶ</p> <p>■ 支援活動における出口戦略策定の重要性について認識する</p>	<p>■ 講義：人道支援の質と支援者の説明責任について</p> <p>■ ディスカッション：プロジェクトの終了について、ケーススタディーを基に参加青年同士話し合った。グループ毎に検討した課題は以下である。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ プロジェクトの成功は如何に測るか？</li> <li>・ プロジェクト終了の適切なタイミングを決定するに当たり、何が目安となるか？</li> <li>・ プロジェクト終了時点においても残された課題がある場合、何ができるか？</li> </ul>
このセッションの主な学びと成果	
<p>● 質の高い、説明責任を伴った活動を実施することの重要性</p> <p>● 出口戦略を策定することの重要性</p> <p>● 参加青年の専門的な実務内容及び体験談の共有</p> <p>このセッションでは、防災を担うセクターの中でも、特に人道支援団体についての批判的な分析を行った。参加青年は支援の質と説明責任の概念について議論し、同時に人道支援実施者向けのガイドブックである「人道支援の質と説明責任に関する必須基準」「スフィアプロジェクト(人道憲章と人道対応に関する最低基準)」「グッドイナフ・ガイド(緊急人道支援の効果測定とアカウンタビリティ)」を受け取った。参加青年は、適切な活動を行うこと、責任をもってリソースを使うこと、透明性を保つこと、コミュニティに対して適切に関与・滞在・撤退することについて学んだ。本セッションを通じて参加青年は「良く行うこと」と「危害を加えないこと」の違いを深く理解した。</p>	
セッション 5：ステークホルダーの自発性を高めるコミュニケーション	
目的とねらい	活動の内容
<p>■ ステークホルダーのモチベーションを高めるための、コミュニケーションの要素を学ぶ</p>	<p>■ 講義：アロン・アントノフスキーによる理論に基づいた、効果的なコミュニケーションのための三要素について</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>i) 「わかる (=把握可能感)」：情報把握</li> <li>ii) 「できる (=処理可能感)」：資源調達</li> <li>iii) 「意味がある (=有意味感)」：各人にとっての利点・動機の源泉</li> </ol> <p>■ ディスカッション：参加青年は、状況が理解できない、もしくは状況をコントロールできないことに対する恐れなど、何がストレスを引き起こすのかについて書き出した。また、それらのストレス要因を、上述の三つの要素に照らして分類した。</p> <p>■ プレゼンテーション：参加青年は事前課題で準備した将来運営したい防災活動について発表があった。</p>

#### このセッションの主な学びと成果

- リーダーであるためにどうするか（タスクをわかりやすく、扱いやすく、意味あるものとする）
- 目的達成のため、いかにビジョンを掲げ、個人的なストレスを減らすか
- 情報・資源・報酬のモデル

このセッションでは、課題やストレスに直面する際の個々人の能力について焦点を当て、アーロン・アントノフスキーが提唱する医療社会学理論を学んだ。この理論によると、人が課題やストレスを乗り越える時の重要な要件は首尾一貫した感覚を発達させることである。防災活動においては、分類の三つめの要素である有意味感が重要である。意味を見出せなければ人々のモチベーションは低下するであろうし、状況改善に向けた努力をしようと動機づけられることはないであろう。

#### 4. ファシリテーターのコメント

本コース・ディスカッションの目的は、各参加青年がコミュニティのレジリエンスを高めるために、防災の観点からリーダーシップ能力を習得することであった。したがって、リーダーシップ能力の中でも、世界的な防災潮流の文脈における市民社会組織（CSO）の役割、人道支援のグローバルスタンダード、多様なセクター間の効果的な連携、ステークホルダーのモチベーションを高める上で効果的なコミュニケーションの要素等についての理解に、指導の力点を置いた。また、各家庭やコミュニティにおける潜在的なリスクに対する関心を高めるために、災害シミュレーションを通じた実習の機会も設けた。

事前課題は互いから学び合うための教材として活用され、参加青年はセッションを通して各自の様々な経験・関心・ビジョン・アクションプランを共有しあった。参加青年ごとにそれぞれ固有のトピックやビジョンでありながら、バックグラウンドにおける違いを越えて大いに共感を覚えるものであった。

コース・ディスカッションは、いかに人道及び人権という共通の価値に根差して世界中のCSOが防災活動を実施しているかということの理解から始まった。未来のCSOリーダーとして、参加青年たちは適切かつ責任を伴った人道支援策を計画・実施する上での重要な視点について検討したが、その目指すところとは、安定した状況で被災者が尊厳をもって生存・回復できるようにすることである。さらに、防災・減災計画の協議プロセスに多様なステークホルダーを巻き込むことについても焦点を当てた。将来、参加青年はここで得た知識を実践の場で行ってほしいであろう。

また、やる気を引き出すコミュニケーション・スキルを身に付けるため、ストレス対処能力に関するアントノフスキー（1979）の「首尾一貫感覚(Sense of Coherence = SOC)」モデルを基礎とした、その中核となる三要素、把握可能感（「わかる」感覚）、処理可能感（「できる」感覚）及び有意味感（「意味がある」感覚）についてもコース・ディスカッションで育成した。ここで把握可能感とは、出来事が論理的で秩序があり、矛盾なく構造化されていると理解する程度を指す。また、処理可能感とは人が対処可能であると感じる程度を指し、有意味感とは、人生に意味を見出し、試練には立ち向かう価値

があると感じる程度のことをいう。強いSOCは人生の満足度を高め、疲れ・孤独・不安を和らげるとされる。被災者に対してメンタルヘルス及び心理ケアを提供するという文脈における理解のみならず、参加青年がこの理論を応用しながら、互いにビジョンを表明し、応援しあう関係を築いていく様子は、非常に喜ばしいものであった。参加青年にとっても、社会貢献への一歩を踏み出す自信となったことであろう。

日本・ニュージーランド・フィジーにおける課題別視察は、防災を担う主要なセクターとそれぞれの重要な役割に関する理解を促進し、コース・ディスカッションの目的に対して非常に有意義なものとなった。訪問各国それぞれの第一人者の方々から説明を受けたことによって、これらのセクターが実際のところどのように交流・連携・協働しながら、地域社会及びグローバル社会において防災を主流化しているかという包括的な理解が深まった。

全体的に、コースは主な目的とねらいを満たしたと言える。サマリーフォーラムでのプレゼンテーションにも反映されていたとおり、防災に関する学びは、課題別視察を通して得られた多くの知識と照らし合わせることで、さらに総合的に深まった。参加青年は積極的市民となるための新しい視点やヒント、そして真の知恵を得てくれたものと思う。

コース運営に関しては、英語力と専門的経験において参加青年の間にバラつきがみられ、初期の段階で大きな問題点として認識された。そこで、コースディスカッション委員会メンバーの発案により、様々なレベルの青年たちが混ざり合った小人数のディスカッションチームを編成した。それにより以降のセッションでは一貫して、参加青年は第二言語としての英語話者に対するコミュニケーション上の細やかな配慮を示し続けた。また、専門的背景を持つ参加青年は積極的に彼らの実務経験や知見を皆に提供するようになった。ファシリテーターからは、基本的な情報を記載した参考資料は英語版と日本語版の両方を用意した一方、上級者の学習ニーズには副教材を配布することで対処した。

このたび防災コースの参加青年と共にいられたことは、大きな喜びであった。彼らは、一人一人が豊かなりソースを持つ個人として存在すると同時に、集団として

の力を最大化し、SWYプログラムの特性を存分に発揮した。殊に、コース・ディスカッション委員が発揮したすばらしいリーダーシップと、参加青年全員の活発な参加が、本コースを価値ある場に創りあげたことを特筆したい。

リーダーとして存在することは、必ずしも薔薇色のプロセスではないかもしれない。しかし、参加青年一人一人がこれから社会にもたらすプラスのインパクトは、彼らが手を差し伸べようとする人々の前途を薔薇色の光となって照らすことだろう。各自の地域コミュニティで、またグローバル社会において、参加青年がリーダーシップの担い手となってくれることを期待し、彼らの輝かしい未来を祈念したい。

.....

## 5. 参加青年の感想

チェイタナ・タマダディ (インド)

コースディスカッションは私にとって、災害リスクマネジメントの多様な側面に関する包括的な学びの場となった。コースは、災害の前提条件や必要時に期待される役割について批判的に思考するよう参加青年を励まし、その目的を達成していった。コースでの最も重要なポイントが理解しやすいよう、授業の流れは非常に明確であり、わずか5回のセッションでありながら災害の定義、防災活動の重要性、防災活動主要な担い手、CSOの役割など、災害に関連する概念が最大限にカバーされていた。

授業を聴講する際、人はそのテーマについて理論的な知識とともに実践的な学びを期待することであろう。本コースには課題別視察も組み込まれており、その点についても満たされていた。例えば、最初の訪問先である国際協力NGOセンター (JANIC) では、どのようにしてNGOやNPOを束ね、支援を目的としたネットワークを組織しているかを理解することができた。次に訪問した池袋防災館で経験した自助トレーニングは、緊急時に自身の身を守るうえで非常に有用であった。私のように災害をほとんど経験したことがない者にとって、被災者の立場に身を置き換え自分自身を救う行動を学ぶのは、スリルを感じる訓練であった。危機管理センターはどのように機能しているのかという私の疑問については、ニュージーランドのオークランド市にある民間防衛・緊急事態管理センターのスタッフによるシミュレーションに参加したことで、明快な答えを得られた。それはすばらしい経験であり、私自身のキャリアを変更してこの分野で働きたいという気持ちをかき立てるものであった。フィジー赤十字社では、必要とされる状況下におけるボランティア精神の力を教えてくれた。それは社会で見られる他者への思いやりの最高の例であった。他者を助けようとする多くの努力・計画・実行の事例に触れ、私も

地元でボランティアグループを立ち上げたいと強く感じた。

寄港地活動後の振り返りセッションでは、帰国後にそれぞれの場所でリーダーシップを発揮し活動を始めたなら直面するかもしれない問題を含め、考えや理想、また意見を共有しあい、おかげで採り得る解決策をも思いつくことができた。

コースのメンバーから聞いた彼らの実体験や職業経験の話も非常に啓発的だった。この人々が、これから必要な時にはいつでもコンタクトをとれる仲間なのだと感じたことだろう。SWYプログラムの重要な目的の一つは、同じ志をもつ人々とのつながりを築くことである。世界中からの参加青年にとって、災害状況下の自国の役に立つためにつながりあえる素晴らしいプラットフォームを本コースが提供してくれたと確信している。

最後に、コースの中に友好的な環境を作り出し、インタラクティブな手法を取り入れたり、我々の質問の多くに回答を与えながら、分野の深みを理解させてくれたファシリテーターに感謝している。

岡本克幸 (日本)

東日本大震災に強く影響されたことをきっかけに、ボランティアとして被災地支援を行ってきた私は、かねてより防災・減災活動に強い関心があった。しかし、自身の居住する地域に目を向け行ってきた啓蒙普及活動では、災害リスクが低いと言われている地域ゆえの住民意識の低さに悩み、また団体メンバーのモチベーション維持という点においても難しさを感じていた。そのような経緯から本コースに参加して、「仙台防災枠組」に掲げられた目標の達成に今後どう貢献し得るか、また、自身のステークホルダーとしての役割の在り方を考えることができた。

5回に及ぶセッションでは、災害リスクについての理解から、防災分野におけるリーダーシップの在り方まで、防災活動をどのように運営して行くことができるのか広く学ぶことができ、セッション毎に自身のボランティア団体の状況と照らし合わせて反省することができた。

東京・ニュージーランド・フィジー共和国での施設訪問では、ステークホルダー間における連携の重要性を学んだ。特に、フィジー赤十字社は、私が所属するボランティア団体と同じ母体の下で活動を展開している組織だった。そのため、両国における災害対応システムや防災のノウハウを比較することができた。フィジーでの課題を知り、日本における防災技術を彼らへ紹介したいと考えた一方で、訪問先で見聞した事例からは、いかに地域に密着し、地域の需要に根差した活動を展開しているのかを学んだ。このことは日本における自身の活動を見直す上で大変有意義な学びの機会となった。

本コースでの学びを基に私自身の今後の防災活動を考

えるに当たり、他ステークホルダーとの協働も視野に入れることで、可能性が広がった。また、防災活動を行う上でいかにしてリーダーシップを発揮していくか考えたことで、自身の団体におけるマネジメント課題についても解決の糸口を見つめることができたように思う。

今後の抱負として、自身のコミュニティだけでなく、いずれは地域を越え、広範にわたって防災・減災の分野でリーダーシップを発揮していきたいと強く感じている。

## 国際貢献活動コース

### 副題：より良い社会のために国境を越えて協力しよう！

ファシリテーター：ムッタリカー・プルクサーボン

参加青年：41名（日本参加青年20名、外国参加青年21名）

#### 1. 目的とねらい

##### コースの目的

「国際貢献」とは人により様々な意味で理解されている。国際交流プログラムから大学の研究協力、外国とのパブリック・プライベート・パートナーシップ (PPP=官民協力)、国際法や自由貿易協定などまで含まれている。国際貢献は多様な理由のもとに多様な形で実践されているが、このコースは、開発という側面から国際貢献に焦点を当てる。本コースを通して参加青年は、国際貢献の目的、背景、過程、プロジェクトに携わるアクター（機関や団体、人物など）に対する理解を深めるとともに、知識や技術・能力が、国境を越えて他国や国際社会の発展に貢献できるのかを検証する。

参加青年は、コースを通して一人一人が持続可能な開発に向けた国際貢献の役割を理解するとともに、将来積極的に国際貢献活動を実施できるようになることを目指す。

##### コースのねらい

本コースでは、講義やケーススタディ（事例研究）、グループ・ディスカッションなどを通して、国際貢献活動への理解を深める。国連開発計画 (UNDP) や国際協力機構 (JICA) などの機関に加え、国内や地域に根差したNPO、また個人レベルでの活動など、国際貢献に従事する多様なアクターの役割について考察する。本コースは、参加青年がそれぞれの経験を共有し、各国で実施されている様々な国際貢献活動から学び合うことができる場を提供する。参加青年は、コースを終えた際に事後活動として実施したい国際貢献プロジェクトを計画するために、必要な知識や技術を身に付ける。

#### 2. 事前課題

##### 2-1. 日本参加青年のみの事前課題

国際貢献活動に携わる日本人既参加青年の活動事例を探し、インタビューをしてその内容をレポートにまとめる。レポートは和文・英文で作成し、両方併

せてA4用紙一枚程度に収め、コースのメーリングリストを通じて提出すること。

インタビューはグループで実施してもよい。ただし、事前課題への一人一人の貢献度が薄まらないよう、グループの人数は最大四名までとする。対面インタビューの実施が困難な場合は、ビデオチャットやメールを活用してもよい。周囲にインタビューできる既参加青年がいない場合は、自身の学校の卒業生などを対象とする。

インタビューの質問は参加青年自身で考えるものとする。事業を終えた後に自身がどのような国際貢献活動に従事できるようになっていたかを考えるための課題であることを念頭に、効果的な質問を準備した上でインタビューに臨むこと。

##### 2-2. 日本参加青年・外国参加青年共通の事前課題

###### ・ 自己紹介

メーリングリストを通じて、自由な方法で自己紹介する。その際にはなぜ国際協力に興味を持ったのか、そして、このコースから学びたいことは何かを必ず述べる。

###### ・ ポスター発表の準備

コース・ディスカッション中、参加青年が関わったことがある国際貢献活動を紹介できるよう、発表の準備をする。もし自身がこれまでに国際貢献活動に関わった経験がない場合は、自分の国が実施している国際貢献の事例を題材とする。ポスター発表の内容は必ず以下の情報を含める。

- プロジェクトの名前
- 実施機関
- プロジェクトの目的／狙い
- 目的を達成するために行われた活動内容
- 受益者
- 結果

仕様：カラーポスター（A4サイズ）一枚。文字だけでなく写真やイラストを利用して、見やすく面白いものにする。12月20日までにメーリングリストを通じてPDFで投稿し、原本はコース開始時に手渡しで提出する。

- 参考：  
持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）  
<https://sustainabledevelopment.un.org/sdgs>  
<http://www.un.org/sustainabledevelopment/sustainable-development-goals/>

### 3. 各セッションの概要

セッション 1:「国際協力」とは何だろう？	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ コース概要を理解する</li> <li>■ 参加青年が国際協力に関してお互いの経験を共有する</li> <li>■ 国際協力という概念について理解する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ オリエンテーション（コースの全体像／進め方、参加青年たちの目標の共有、安心して発言／質問できる空間作り）</li> <li>■ PYのポスター発表：国際協力に関わった経験を各自2分で発表する。</li> <li>■ ワークショップ：PYの経験をマッピングして国際協力を理解する。</li> <li>■ 学びの振り返り：国際協力とは？</li> </ul>
このセッションの主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 相互の議論を通して、参加青年の国際協力における互いの気づきを復習することができた。</li> <li>● 続く議論を通して、国際協力とは、一つの共通の目標に取り組む二つ又はそれより多くの国が含まれる、パートナーシップ又は活動に関するものだとして参加青年は結論づけた。</li> </ul>	
セッション 2: 国際協力をするのは誰か？	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 国際貢献と国際開発協力について、様々な組織と個人の事例から学ぶ</li> <li>■ 国際協力に関わっている多様なアクターの活動を分析する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 学びの振り返り：東京での課題別視察</li> <li>■ プレゼンテーション（UNDP や JICA のような国際開発機構、NPO、個人的な経験などの事例）</li> <li>■ ディスカッション：国際協力・国際開発において、多様なアクターの役割</li> </ul>
このセッションの主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● JICA への施設訪問と OISCA によるプレゼンテーションは、参加青年にとってこれらの機関の国際協力での役割を理解するのに役に立った。参加青年は、相互の同意の上で動く JICA のような政府機関の役割と、より草の根レベルで動く OISCA のような機関の役割の差異に気付くことができた。</li> <li>● コース事前課題ポスターは、国際政府、NGO/NPO、そしてビジネスセクターと個人を含む国際協力での、それらアクターの異なる役割について考える議論を参加青年がすることに使われた。</li> <li>● また、参加青年は、国際連合の役割と、政府開発援助に取り組む先進国の貢献における国際的な合意について学んだ。質疑応答を通して、特に先進国政府への経済的な圧力が起こった後の政府開発援助の傾向の推移と、近年の非政府開発援助経路での国際協力において、いかにして私的企業とビジネスの役割が明瞭になったか学んだ。</li> </ul>	
セッション 3: なぜ国際協力をするのか？—グローバルな目標と持続可能な開発	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 持続可能な開発目標（SDGs）を理解する</li> <li>■ 開発に求められる成果と SDGs との関連を分析する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ プレゼンテーション（SDG について）</li> <li>■ ワークショップ：ポスター発表内容と SDGs</li> <li>■ グループ・ディスカッション（「私たちが目指す世界」                     <ul style="list-style-type: none"> <li>— なぜより良い世界を作りたいか？</li> <li>— より良い世界を作るために、私たちは協力できますか？もし「はい」の場合「何を？」、「いいえ」の場合「なぜ？」</li> </ul> </li> </ul>

このセッションの主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● バヌアツでの短期訪問で見られた国際協力プロジェクトの様々な例において、特に AUS0AID、NZAID、JICA、国際連合そして世界銀行など様々な政府機関に支援されたプロジェクトについて、議論を交わした。</li> <li>● MY WORLD の質問紙への回答によって、国際連合の持続可能な開発目標の発展を知り、開発の国際的必要性を学んだ。また、映像資料は、ゴールがどのようにして構成され、これら 17 のゴールに辿り着くのに共同する必要性があることについて、参加青年の理解を高めた。</li> <li>● また参加青年は、互いの言葉を使うゲームを通して、疑似国際協力のシナリオを経験し、なぜ国際協力が不可欠であるのか、それが協力し共有することである、という理由を連結をすることができた。参加青年は、国際協力は異なる国々を共同させ一緒により良い世界をつくる取組に専念することに重要な役割を果たしていると学んだ。</li> </ul>	
セッション 4：行っている国際協力はポジティブな貢献をしているか？	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 国際貢献で注意すべき点を理解する (例：異文化の理解、現地のニーズ、倫理的行動など)</li> <li>■ 国際開発に関する行動規範</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ディスカッション (国際開発のメリットとデメリット、チャレンジ、透視度、アカウンタビリティなどの注意すべき点を踏まえて討論)</li> <li>■ プレゼンテーション：国際開発に関する行動規範</li> <li>■ ワークショップ/グループ・ワーク： <ul style="list-style-type: none"> <li>ー セッション3で紹介した協力を実施するとしたら、注意しなければならない点は何か？その協力において、ポジティブな貢献</li> </ul> </li> </ul>
このセッションの主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 参加青年はファシリテーターの国連開発計画をはじめとする国際機関での経験を通して、国際貢献について学んだ。</li> <li>● 国際貢献プロジェクトの履行についての議論を通して、参加青年は国際貢献プロジェクトの評価を定式化することの必要性を理解することができた。特に、ふさわしい計画の範囲や目標そして対象国の発展への影響を特定することである。</li> <li>● 参加青年はファシリテーターから共有された関連する映像資料を通して、国際貢献という世界における成功の機会について学んだ。</li> </ul>	
セッション 5：私たちが目指す世界に向けて	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 開発計画によく使うロジカル・フレームワークを紹介する</li> <li>■ SWY 後のアクション・プランを作る</li> <li>■ これまでの学習事項のまとめ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 学びの振り返り：訪問国活動</li> <li>■ プレゼンテーション：開発計画によく使うロジカル・フレームワーク</li> <li>■ ワークショップ/グループ・ワーク：「私たちが目指す世界へ」、参加青年がより良い世界を作るため、SWY 後にどのような国際協力を実施したいかを考え、アクション・プランを作る。</li> <li>■ PY の発表：(5 分× 10 グループ)</li> <li>■ 学習事項をまとめ、個人振り返りの時間を設ける。</li> </ul>
このセッションの主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 過去のセッションの要約と寄港地活動の報告を通して、参加青年はプロジェクト構成の核となる要素、またプロジェクトデザインと国際協力によって期待される影響の重要性を復習することができた。</li> <li>● 前回までのセッションの学習を振り返り、参加青年は 2030 年にそれぞれが望む世界についての個々の視点から熟考し持続可能な開発目標と自らが望む世界を注意深くすり合わせた。</li> <li>● さらに、参加青年は自らが貢献したい持続可能な開発目標のゴールごとに小グループに分かれた。同じような興味、関心を持つ小グループの中で参加青年は活発な議論をするとともに、現在のスキルやネットワークを用いて貢献できる国際貢献に関する事後活動をより具体的に起草した。</li> </ul>	

#### 4. ファシリテーターのコメント

コース・ディスカッションの準備は、特に船上研修での設備や広さといった外的環境、及び参加青年たちの経験や興味の違いを鑑みたときに、大変難しいものであった。しかし、いくつかの要因により、コース・ディスカッションは成功裏に終わったと思われる。

一つ目として、コースの最初に参加青年たちがオープンに自身の期待を共有し、お互いの中にある恐れを話し合うことができたことが挙げられる。それを通して、1)

全ての参加青年がお互いを尊重すること、2) 違う意見に対して評価判断をしないこと、という全体で合意したコースルールを設定することができた。このルールは、その後に参加青年たちが自分の考えを話し合い、共有するに当たって、オープン、かつ安心安全な雰囲気と、お互いをサポートしあう環境を醸成するのに役に立った。

二つ目は、ファシリテーターと参加青年との間で行ってきた継続的なフィードバックである。これを行うことで、コースの内容とファシリテーションの手法を調整し、

それぞれのセッションの核となるメッセージに触れつつも、参加青年たちをディスカッションに巻き込むことができた。このコースでは、グループ・ディスカッションは、1グループ6人が最適人数であるという合意がなされた。

最後に、このコースの成功は参加青年の積極的な参加によるものだと確信した。彼ら彼女たちは、自分の経験や意見を共有するに当たって、とてもオープンでいてくれて、それによりコース・ディスカッションがとても実りあるものになった。私自身、この優秀な参加青年たちの学びを促進するためにコースに関わられたことはとても楽しいことであった。私は、参加青年たちがこのコースから何かを学び取り、プログラム後の生活に持ち帰ってくれることを期待する。

.....

## 5. 参加青年の感想

アナントウ・シャム・ラヒージャ（インド）

国際貢献（IC）コースにおける議論は十分に有益であり、現在の現実のニーズに関連している。国際貢献コースは参加青年に世界に対する見方を議論する場と協力して達成するために利用できる場を提供してくれた。参加者は11の国々とさらに多くの地域社会のような出身地の特有の文化を含めた多様な集合体を代表している。ファシリテーターは参加青年をグループ活動や議論。そして実地調査でコースディスカッションをリードしてくれた。この方法は文化的な気づきや相互の信頼を生み出すのに理想的である。

さらに、我々は政府開発援助などの国際貢献の専門的な概念についても議論した。国際貢献活動における批判的な設計や監視手法を学ぶことで、今後の国際協力プロジェクトの更なる発展に期待を込めた。

国際連合やJICA、OISCA、AIESECなどの国際機関での勤務経験の共有を通して我々は新しい概念や困難を学んだ。

我々は国際連合によって作られた持続可能な開発目標とその達成度を測る指標を紹介された。私は包括的な全人類の生活の質の向上とそれらのゴールに言及されていることに感動した。

策定された17のゴールによって、人類は2030年に良い世界を作るべくビジョンを統合できたことが分かる。

私は持続可能な開発目標に関する議論はこのコース・

ディスカッションにおいて最も重要なセッションだったと思っている。持続可能な開発目標は私たちが共同的なプロジェクト、ボランティアや参加を通して世界的な幸福に寄与することを助ける。

公式訪問の際、我々は横浜でJICAの政策レベルでの経営メカニズムについて学ぶ機会を得た。加えてフィジーやバヌアツでは、国家規模並びにコミュニティレベルでのJICAによるプロジェクトのもたらす好影響について、実際のプロジェクトに赴く機会を得た。こうした政府機関や実際の現場で働く人の話に加え、Green Peace や Fair Trade、AIESEC や RYAN (Refugee Youth Action Network) といった国際NGOの代表らと交流の場を設け、理解を深めた。

フィールドワークにおいて実際の現場に接し、現地職員とのふれあいを経ることで本コースでの学びはより意義のあるものとなった。さらには、ファシリテーターであるムッタリカー博士（通称マイ氏）が、コースにおける学びを楽しく意義深いものとするべく様々なゲームやグループアクティビティを行った。マイ氏はカリスマ性溢れる指導で、政治や人権、社会問題といった議論の難しい分野での豊かな就労体験があり、豊富な知見に基づいた講話の数々は私の好奇心を刺激し、それだけでなく受講者の多くにとって国際協力に携わることが将来の職業選択肢となった。

本コースは世界の将来をリードする青年らに対して、地球規模の課題についての啓蒙と、国際協力を通じた課題の解決についての重要性を再認識させる契機となった。コースにおける議論は非常に活発で、学びを得る度にしっかりと習得する課題が提供されており、熟考の上での授業運営であったと認識している。また、帰国後の各々の行動計画について共有する時間を持ち、着実に実行するために努力していきたいと思う。私は心から本コースの一員として迎えられたこと、そしてすばらしい指導者のもと数多くの学びを得られたことに感謝している。本コースにおいては事務作業を担当した委員会、副委員会ならびにサマリーフォーラム委員会とも共同で仕事を行う機会を持った。それが、多様な国籍やバックグラウンドを持つ参加青年との相互理解を得ることができたまたとない機会であった。私は将来における本コースがより多くの講話や議論の機会、そして組織訪問や課外活動の機会を持つことを提案し、レポートの結びとした。

### 副題：責任あるツーリズム – 批判的視点から出発する旅

ファシリテーター：ユン・オスン

参加青年：39名（日本参加青年21名、外国参加青年18名）

#### 1. 目的とねらい

##### コースの目的

責任あるツーリズムとは、現代のツーリズムが、訪問先の経済、文化、環境に対して与える負の影響を認識することから始まる。責任あるツーリズムはこうした課題を克服し、旅行者が訪問地において、あるいは訪問地が旅行者に対してより良い影響をもたらすことを目指す。責任あるツーリズムは、客船を使用した旅行から、バックパッカーなどの個人旅行に至るまで、あらゆる旅行を対象とし、旅行者の責任や姿勢を変えることで、旅行者であるゲストと、受入先となるホストとの関係の歪みを正す。本コースは旅行者と受入先の両者の視点に立脚し、エコツーリズム、持続可能なツーリズム、倫理的なツーリズムなど、あらゆる分野の様々な形態のツアーを考察する。このコースを通して、参加青年は旅行者として、あるいは旅行者を受け入れる訪問地の居住者として、ツーリズムのもたらす結果を批判的に分析するとともに、自身が所属する社会に貢献できるようになる。

##### コースのねらい

参加青年は、ツーリズムに対する経験や姿勢を題材に議論し、様々な形態のツーリズムに対してより批判的に考察をし、異なる形態のツーリズムがそれぞれどのような課題に直面しているのかを理解する。責任あるツーリズムの深い理解を目指し、本プログラム（SWY29）を一つの事例とするとともに、各参加青年の個人的な経験から学び合うことで、扱う問題や議論をより現実的かつ実践的なものとする。参加青年が旅行者であるか、旅行者を受け入れる土地の住人であるかにかかわらず、このツーリズムに関する批判的な考察は適用できる概念である。事業期間の大半の時間を過ごすにぼん丸は、責任あるツーリズムを実践するための現場でもある。だからこそ、参加青年はコースの学びをそれぞれの日々の生活に還元することが期待される。参加青年は、責任ある旅行者の一人として、船内生活及び寄港地での活動において周囲に様々な呼びかけをするプロジェクトを実施する。また、寄港地活動終了後は、責任あるツーリズムの観点から、自身が経験した活動に関する印象や考察を基に議論する。

#### 2. 事前課題

##### 2-1. 日本参加青年のみの事前課題

既存のツーリズムが訪問先となる観光地において、社会的、経済的、あるいは文化的に負の影響を与えている事例を一つ取り上げ、レポートを書くこと。取り上げた事例の概要と、どのような経緯で負の影響が生まれているか、その経緯について具体的に描写し、A4用紙一枚以内にまとめてコースのメーリングリストに提出する。

##### 2-2. 日本参加青年・外国参加青年共通の事前課題

1) 下記の点についてA4用紙二枚以内（Word）でレポートを書き、コースのメーリングリストに12月30日（金）までに提出する。原本はコース開始時に各参加青年が持参すること。また、いずれかのトピックを象徴する写真を撮影し、コースに持参すること。

- 自国や出身地の観光地
- ある場合、ツーリズムを考察する上で有意義な体験について共有すること。
- “cruise tourism”や“cultural tourism”について調べ、それらのツーリズムが直面している「責任」に関する課題について、具体例を示しなさい。
- 旅行者として、あるいは旅行者を受け入れる観光地の居住者として、あなたの活動がどのように地域や国際社会に貢献することができ、責任あるツーリズムの視点を踏まえて書きなさい。

2) 下記のサイトで紹介する、責任あるツーリズムに関するプログラムの中から、どれか一つを選んでその内容を要約する。その際、もしそのプログラムにおいて解決すべき課題があれば、どのような解決方法があるかも併せて述べること。



3. 各セッションの概要

セッション 1: コース概要と課題別視察準備	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ツーリズムの負の影響について理解する。</li> <li>■ 現行のツーリズムに代わり、台頭する責任あるツーリズム（持続可能なツーリズム、倫理的ツーリズム、エコツーリズム）について理解する。</li> <li>■ 責任あるツーリズムの概念を理解する</li> </ul>	<p>&lt;レクチャー&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ コース概要とアイスブレイキング</li> <li>■ 現代のツーリズムの様々な形態を理解するためのスライドショー</li> <li>■ 様々な地域におけるツーリズムによる負の影響</li> <li>■ それに対抗する新たなツーリズムの存在</li> <li>■ 責任あるツーリズムの概念</li> </ul> <p>&lt;ワークショップ（6～7名のグループ）&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 名前、出身地の紹介</li> <li>■ コースの志望理由</li> <li>■ 日々の生活で実践できる活動についてアイデア交換</li> </ul> <p>&lt;発表（各グループ5分）&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 代表者によるグループワークの学びの共有</li> </ul>
このセッションにおける主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 韓国のある地域における観光産業促進のための政策をまとめたビデオを見た。そして、地方都市においても資源を最大限活用し、観光産業を促進させることができることを学んだ。</li> <li>● 責任あるツーリズムを中心として、教育・環境・食料に関わるツーリズム形態について学んだ。</li> <li>● 少人数のグループに分かれ、プログラム期間中において、陸上研修中、船内での生活を含め、責任あるツーリズムの概念を実践するためには、何をすべきなのか議論を行った。</li> </ul>	
セッション 2: 課題別視察の振り返りとツーリズムに関する経験の共有	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 課題別視察で訪問する場所について理解を深める。</li> <li>■ これから始まる旅と責任あるツーリズムに関するつながりを知る。</li> <li>■ 責任あるツーリズムの様々な取組について理解する。</li> <li>■ 船内で、他の参加青年に対し、責任あるツーリズムに対する意識の向上を呼びかける方法を考える。</li> <li>■ 船の生活と、責任あるツーリズムの理論との関係を理解する</li> </ul>	<p>&lt;レクチャー&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ スライドショー：様々な土地で取り組まれる責任あるツーリズムについて</li> <li>■ 旅行者（ゲスト）としての視点、観光地に暮らす受入側（ホスト）としての視点</li> <li>■ 課題別視察準備</li> </ul> <p>&lt;ワークショップ（6～7名のグループ）&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 日々の生活で実践できる活動についてアイデア交換</li> <li>■ 責任あるツーリズムの概念とSWYとのつながり</li> <li>■ 責任あるツーリズムという文脈で、SWYが実践できること</li> </ul> <p>&lt;発表（各グループ5分）&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 代表者によるグループワークの学びの共有</li> </ul>
このセッションにおける主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● SWYプログラムにおいて、どのように責任あるツーリズムを実践することができるのかについて、船での生活を想像し、具体的な例を用いつつ話し合った。例えば、責任あるツーリズムの実践を広めるために、ファッションショー、フラッシュモブ、ビデオ・ポスター作成などの提案がされた。</li> <li>● 課題別視察の準備を行い、既参加青年が経営するソーシャルハブ「パクチャーハウス」を訪れた。パクチャーハウスにおいて、フェアトレードと責任あるツーリズムの分野において活動を行っている「ParcelC」というNGO団体の方からお話を伺った。</li> </ul>	
セッション 3: SWYと責任あるツーリズム/船内での活動の開始	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ “Cruise tourism” と “cultural tourism” について理解を深める。</li> <li>■ 発展途上国と先進国において、観光産業により引き起こされる問題について議論を深める。</li> </ul>	<p>&lt;レクチャー&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ “Cruise tourism” と “cultural tourism” の概念</li> <li>■ 責任あるツーリズムに関する意識の向上</li> <li>■ 寄港地活動の準備</li> </ul> <p>&lt;ワークショップ（6～7名のグループ）&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 二つの寄港地活動に向けた準備</li> </ul> <p>&lt;発表（各グループ5分）&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 代表者によるグループワークの学びの共有</li> </ul>

このセッションにおける主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● クルーズツーリズムの負の側面に注目し、環境・経済・社会文化的な側面において、自身の行動評価を行った。</li> <li>● 給油地であるバヌアツでの行動を話し合い、各自の行動がどのように地域社会に影響を与えているのかについて話し合った。</li> <li>● NYC、船、寄港地での行動に大きく分けて、今プログラムにおいていかに責任あるツーリズムを実践することができるのかについて話し合った。</li> <li>● 寄港地のニュージーランドとフィジーの文化や伝統、習慣について、PYから学んだ。</li> </ul>	
セッション 4: 事前課題を題材にした議論	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 各PYの事前課題を題材として議論を行う</li> <li>■ 観光客を受け入れることによって引き起こされる問題の共有</li> <li>■ それに対する解決策を導き出す</li> </ul>	<p>&lt;レクチャー&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 責任あるツーリズム実践の例 (チェジュ島・韓国)</li> </ul> <p>&lt;ワークショップ (6～7名のグループ) &gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ プロジェクトの進捗や成果の振り返り</li> </ul> <p>&lt;発表 (各グループ5分) &gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 代表者によるグループワークの学びの共有</li> </ul>
このセッションにおける主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 事前課題を題材として、PYの各出身地におけるツーリズム産業について話し合った。</li> <li>● 観光産業が与える正負の両側面に注目し、負の側面に対していかに対応していくのかについて議論を行った。特に観光産業によって引き起こされる、地域住民の生活への影響に関して注目した。例えば、ケニアにおける象牙密猟禁止やブラジルや日本における渋滞の増加による地域住民の生活環境悪化が指摘された。</li> <li>● これらの問題に対して、解決策を参加青年同士が考えた。</li> </ul>	
セッション 5: 全体の振り返り・サマリーフォーラム準備	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 学びを参加青年の出身地でどのようにいかにさせるのかを検証する。</li> <li>■ サマリー・フォーラムに向けたオリエンテーション</li> </ul>	<p>&lt;レクチャー&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 四回のセッションの振り返りとまとめ</li> <li>■ サマリー・フォーラムに関する準備</li> </ul> <p>&lt;ワークショップ (6～7名のグループ) &gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ コースの学びや活動がSWYに貢献した点</li> <li>■ 個人としての学びの総括</li> </ul>
このセッションにおける主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 4回のコースディスカッション、寄港地での活動を振り返り、コースでの学びを共有した。</li> <li>● 多くの参加者がこのコースを経て、発展しつつある観光産業において、責任あるツーリズムの概念を実践することに対して積極的であった。</li> </ul>	

#### 4. ファシリテーターのコメント

この事業を通して、文化的かつ教育的専門知識を豊富に持つ参加青年と出会えたことは、この上なく意義のあるものだった。「責任あるツーリズム」(RT) コースは単なる抽象的理論ではなく、実際の社会運動を促すコースである。現在RTには明確な定義がないことから、問題を抱える地域によって協議事項、行動、解決策等が異なる。例えば、経済と観光の関係に重きをおく国もあれば、環境問題、または先進国からの観光客の(問題となるような)行動に重きをおく国もある。

今回、参加青年の助けを得て乗船中及び寄港中の様々な観光事例に目を向け、SWY事業をより責任のあるものにするための課題や解決策にフォーカスした。コースを受けている参加青年の殆どが自分自身が観光客であることを意識していないという事実が驚いた。(気を付け

て行動しないと) 寄港する土地へ悪影響を与えかねないと考えた。クルーズ観光に参加している観光客であることを殆どのRTコース参加青年が意識していないことを実感した。コースが進むに連れて、参加青年たちは船内の固形廃棄物、または使用水について議論するようになり、課題別視察や船内で行われるイベントにおいて、紙コップではなく、自分のマグカップやタンブラー等を持参し使うようになった。このコースから離れた場面においても行動しようとする姿が見られ大変嬉しく思った。

RTコース参加青年には観光システムのホスト側とゲスト側、両方に目を向けるよう促した。参加青年は大抵ゲスト(観光客)であることが多いので、最初はホスト側を理解することが難しいようだった。「ツーリズムリーケージ(観光漏洩)」について話をした際、参加青年が大変驚いていたことが印象的だった。例えば、ある地域

で使われたお金が全てその地域に還元される訳ではないということ。その地域にあるマクドナルドで食事をする、あるいは世界的ホテルチェーンに滞在する、外資航空会社を使用する、免税店で買い物をする、その消費額はその地域社会に貢献しているとは言えないのだ。クルーズ観光産業が与え得る悪影響、そして観光客としての自分たちの良くない行いが海や地域団体に損害をもたらす得ることに対して多くの参加青年は意識を持っていないようだった。

最後のコース・ディスカッションではファシリテーター個人の結論を参加青年に共有する機会を頂いた。多くの参加青年がこのコースで学んだことを今後の旅行や地元の観光開発プロジェクトにいかしたいと話していた。参加青年のコメントには、「様々な観光がもたらす地域団体への損害に対する意識が備わった。」や、「責任ある消費に対し批評的な見方ができるようになった。」等があった。参加青年が責任ある地球市民になるべく努力し、今後の旅行や日々の生活にここで学んだことを実践してほしい。

自分たちの考えや見識をコースを通して共有してくれた全参加者、とりわけ RT 委員会メンバーである牛田育美さん、森亜紗佳さん、杉浦黎さん、サユリ・サカモトさん、ジェニファー・ウィテカーさん、パブロ・コテンコさんに深く感謝する。コースが始まったばかりのころ、自分の意見を話さない参加青年がいたということが最大の課題であったが、委員会メンバーが解決してくれた。委員会メンバーのサポートなしではコースをやり遂げることはできなかった。参加青年のそれぞれの専門分野の成功を心から期待して止まない。

## 5. 参加青年の感想

### コース・ディスカッション運営委員

責任あるツーリズムコースにおいて、教育、クルーズ、フードツーリズムを含む様々な種類のツーリズムについて学びを深めた。そして責任あるツーリズムの概念は全てのツーリズムにおいて求められることを認識した。ゲスト側だけではなくホスト側も含めた両側面において、責任あるツーリズムの実践が求められることを再確認した。また、観光産業が訪問地の地域社会に対してポジティブかつネガティブな影響を与えることを学び、訪問地へ与える影響の大きさを知った。

初めは少人数のグループにおいて、各人がにっぽん丸において責任あるツーリズムを実践するために何を行うことができるのかについて、議論を行った。また、船において「責任あるツーリズム」コースだけではなく、他

のディスカッショングループに対して共有することができているのかについて意見を出し合った。これらのアイデアは非常に単純なものであり、例えば、水筒を持参する、クーラーをこまめに消すなどによって、電気や水を節約することを目的とした行動が挙げられた。

課題別視察においては、責任あるツーリズムの実践と他の分野との関わりについて学びを深めた。例えば、東京でのソーシャルラボ パクチャーハウスにおいては ParcIC という組織の活動を中心として、彼らが世界でどのような活動を行っているのかについて学んだ。特に発展途上国においてどのような過程で持続可能な社会を実現させるべきなのかについて理解を深めた。寄港地においては、ゲストとホストの視点を含む様々な角度からツーリズムについて学ぶ機会に恵まれた。さらに、ツーリズム産業の発展において、地域社会のホスト側の責任についても議論を行った。これらは寄港地である、ニュージーランド、フィジーでの経済的かつ環境的な側面も含むものである。フィジーにおいては、観光産業の発展によって受ける負の影響を知った。特に環境、社会的側面においてダメージを受けていると認識した。

後半のセッションにおいては、自身の出身地における観光産業を取り巻く問題を共有し、解決策を導き出すことを試みた。例えば、PY からは出身地の観光産業の発展を行いたいという意見もあり、観光産業と地域社会への影響について認識する非常に良い機会となった。特に経済、社会、環境を含む側面において影響を与えることを認識した。例えば、ブラジルにおいては観光産業の発展による交通量の増加が引き起こされている、という問題とそれに対する政府の解決策が共有された。また、観光産業を発展させるために、祭りや芸術イベントを開催するなどの新たな方法を学んだ。

また他のセッションでは、SWY プログラムにおいて、責任あるツーリズムになるためのアクションプランについて議論を行った。この SWY プログラムにおいて、どれだけの水や食料が使われているのかについて、知りたいという意見も挙がり、実際に船側に質問を行い、その結果をシェアし、水、電気、食料を減らすことができるのかについて、サマリー・フォーラムについての話合いの際に議論を行った。責任あるツーリズムを実践するための方法について話し合ったが、船の中で実際に行動を起こすことは困難であった。だが我々はこのコースで学んだことを基にして、責任ある SWYers になるためのガイドラインを作成した。だが我々の行動が、未来の SWY プログラムを責任あるツーリズムを実践する場とするための第一歩になり得ると確信している。

### 副題：エンパワメントー体験から実践へー

ファシリテーター：ポール・ファリス

参加青年：38名（日本参加青年21名、外国参加青年17名）

#### 1. 目的とねらい

##### コースの目的

このコースの目的は、自分がエンパワーされ、他者をエンパワーすることについて参加青年自らが理解することである。エンパワメントとは何か、また参加青年がエンパワーする時やされる時、何をどのように感じるのかについて、短期的また長期的視点から探求する。あらゆる人間関係は、相互の成長を促進するための機会となる。私たちは、個人または集団のエンパワメントについて、文化や組織などの文脈を通してディスカッションを行う。

集団のエンパワメントとは、人種、性別、文化、社会および個人により定義される組織やグループをエンパワーすることを指す。私たちが個人、組織、そして国際社会として成長してこられたのは、協力関係が存在したからである。個人の行動の自由は、個人的、社会的、経済的な発展に貢献してきた。人々をエンパワーし、個人を社会に迎え、すべての人が何かに貢献することができると感じられる場を作ることで、私たちは安全で健全な、より繁栄した世界を築くことができる。参加青年はより良い世界を創るために、自分自身や他者をエンパワーするためには、自分や他者をどのようにリードして行けば良いかを学ぶ。

##### コースのねらい

このコースにおける最も重要なねらいは、参加青年が心地よく素直に、どんなことでも質問したり答えたりすることができる、お互いをサポートし信頼し合うことで、互いのアイデアや取組が尊重され評価される安全な環境を作ることである。それぞれのセッションでは、参加青年は大小のグループディスカッションやプレゼンテーション、乗船中の個人的な経験の振り返りを通し、個人、または集団でのエンパワメントや、自分自身のエンパワメントについて学ぶ。本コースでは、まずエンパワメントの定義について話し合う。参加青年は自分自身の短期的、または長期的にエンパワーされた経験に基づき、個人がエンパワメントされることの意味についてディスカッションを行う。次に、参加青年は各自の体験に基づき、相違点や類似点を参加青年の目線で探り、集団のエンパワメントについて考察する。さらに、多文化の環境や国際的な組織でエンパワーし、エンパワーされることを実感するための方法を見つけるため、国際社会とい

う視点に立ち、エンパワメントについて分析する。個人、集団、世界という視点を経て、参加青年がエンパワー（エンパワーする役割を担う人物）の素質を十分に理解し、下船後に活躍できるようになるために、個人として取り組める活動を模索する。

#### 2. 事前課題

##### 2-1. 日本参加青年のみの事前課題

船上のコミュニケーションが最大の交流の基盤である。船上で、コース中に使用する下記のフレーズを話せる準備をしておくこと。自分の意見について短く、鋭く、シンプルに伝えるための、あなたのスタンスをアピールするための道具とする。

- エンパワメントとは\_\_\_\_\_です。
- ディスエンパワメントとは\_\_\_\_\_です。
- エンパワーしてあげると\_\_\_\_\_と感じます。
- エンパワーされていると\_\_\_\_\_と感じます。
- \_\_\_\_\_をしている時、充実感・満足感を感じます。
- コーチングすると\_\_\_\_\_感じます。
- \_\_\_\_\_を経験するためにSWYに参加しています。
- \_\_\_\_\_を勉強しています・いました。
- \_\_\_\_\_で働いています・働きたいです。
- 趣味は\_\_\_\_\_です。
- \_\_\_\_\_が大好きです。

##### 2-2. 日本参加青年・外国参加青年共通の事前課題

- 自己紹介  
12月30日（金）までに、コースのメーリングリストを通じて、チームに対して自分の好きな形式で自己紹介する。
- 二分間レッスン  
自分がシェアしたい事柄について相手をエンパワーする2分間のレッスンを準備してくる（例：何らかの技、トリック、事実、ゲーム、身体表現、考えなど）。レッスンを、言葉を用いたものと用いないものの両方で練習してくること。

- ディスカッション準備  
エンパワメントの基本的なツールを実践し、共有するために、下記の課題に取り組むこと。それぞれの問いに正しい答えはなく、いくつかの問いは、皆さんの考えを掘り下げるために、敢えて曖昧な質問となっている。1月に会うときに、回答を持参すること。

- A)自分がエンパワーされるのはどのような時でどう感じるかについて、またエンパワーされなかった時どのように感じたか、ポイントをメモし、その理由を述べる。
- B)エンパワーできる人と、エンパワーできない人の特徴をリストアップする。
- C)口頭で説明することが上手な人と上手でない人の特徴をリストアップする。
- D)誠実さ、信頼性、平等性、好奇心、共感について、述べる。

### 3. 各セッションの概要

セッション 1: エンパワメント及びエンパワメントされるとは何か。	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ディスカッション: エンパワーするため、エンパワーされたと感じるために知っておく必要のあることについて話し合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 2分間レッスンの発表。</li> <li>■ 誰かをエンパワーするために何を知る必要があるか。</li> <li>■ 人を巻き込む力について話し合う。</li> <li>■ 自分がエンパワーされる時、どのような態度を示す必要があるか。</li> <li>■ 文化的な視点に関する映像鑑賞とディスカッション。</li> </ul>
このセッションの主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 自他をエンパワーするため、自分の知っていることと知らないことを自覚することは大切である。人が最大限の力を発揮できるようにするためには、自分自身に誠実で公平、柔軟であるべきである。</li> <li>● 人を招待することは自分自身を表現し、決断や夢、幸せの共有を可能にするエンパワメントの方法である。これは互いのつながりを強くするため、エンパワメントにおいて大切な要素である。</li> <li>● 2分間のレッスンにより、PYは彼らが持っているスキル、才能、経験を表現することができた。これは互いに助け合って信頼し合い、誠実で自分の弱い部分を見せても否定されないという安全な環境をつくるための鍵であった。</li> </ul>	
セッション 2: どうエンパワーするか。	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ディスカッション: エンパワメントするための土台について話し合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ゴールデンルール、プラチナルールとその意味を比較。</li> <li>■ 個人及びグループをどうエンパワーするか。</li> <li>■ エンパワメントの文化をどう確立できるか。</li> <li>■ 参加青年の文化間での相違点を話し合う。</li> </ul>
このセッションの主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「Anticipation (Preparation)」「Participation」、そして「Reflection」は継続的に成長するための循環性のある過程である (APR サークル)。</li> <li>● 「Diamond Rule」とはYEチームによって作られたものであり、「自分と相手にとってメリットのある人間関係をつくり、相手のために何かをしなさい」という内容であった。それは互いに助け合うようにすることで、エンパワメントについての対話の中でできたルールであり、一方的な「Golden Rule」と「Platinum Rule」を発展させてできたルールである。</li> <li>● 効果的に人をエンパワーできる話や一対一の会話をするためには、ある程度の情報が必要ではあるが、感情的なつながりを作ることが欠かせない点である。</li> </ul>	
セッション 3: 自分の経験	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ エンパワメントとディスエンパワメントについて話し合う。</li> <li>■ 個人と地位による権力に対する考えをシェアする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 以下4つの質問に関する小グループワーク: 1. どのようにエンパワーしたことがあるか。2. どのようにディスエンパワメントしたことがあるか。3. どのようにエンパワーされたことがあるか。4. どのようにディスエンパワメントされたことがあるか。</li> <li>■ エンパワメントとディスエンパワメントのロールプレイ</li> <li>■ 映像鑑賞: リーダーシップの行動</li> <li>■ APR サークルを用いたナショナルプレゼンテーションの振り返り</li> </ul>

このセッションの主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「Curiosity (好奇心)」と「empathy (共感)」が関係性を濃くするために引用された。</li> <li>● 「私達はみんな一緒にいる」というのはエンパワーするための合言葉である。</li> <li>● だれでもエンパワーしたことがあり、エンパワーされたことがある。そしてディスエンパワーしたことがあり、されたことがある。これらの経験を共有することで信頼感と協調性が高まる。</li> <li>● 自分の特徴と能力を発揮することによって、エンパワーできるのがパーソナルパワーである。その一方でポジショナルパワーは自分の立場に基づいて独裁主義的に人に命令する際に使われる力である。</li> <li>● 最終的な教訓：「早く行きたかったら一人で行きなさい。遠くまで行きたかったら、みんなで行きなさい」</li> </ul>	
セッション 4：個人から世界へ	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ディスカッション：エンパワメントのルーツについて話し合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 平等と公正について話し合う。</li> <li>■ どこからエンパワメントが生じるか。</li> <li>■ 人間の素質の国連と政府の義務。</li> </ul>
このセッションの主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● Fairness と Equality は異なるものである。Fairness とは、個人や社会をエンパワーさせるために障壁を取り除くことである。</li> <li>● 自分の親を選ぶことができない一方で、学びの為に人生を通してロールモデルを選ぶことはできる。</li> <li>● 政府は国民の人間としての能力をより良いものにする為のツールを与えなければならない。家族を尊重する一方で、政府は子どもたちや弱い立場にいる人々を守らなければいけない。</li> <li>● 人が落ち込んでいるときにその人の性格を評価してはいけない。人の性格を評価する時は、その人が誰かに対して力を発揮するときによく観察せよ。</li> </ul>	
セッション 5：コミュニケーションによるエンパワメント	
目的とねらい	活動の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ ディスカッション：仲間とつながり、エンパワメントを一生の学びにするための方法を話し合う。</li> <li>■ ディスカッション：「あなたの人生は、あなたの選択によってではなく、あなたが他者をどのように扱うかによって定義される」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ エンパワーが上手な人の特徴について共有する。</li> <li>■ アクティビティ：問題解決のコミュニケーションスキル</li> <li>■ 人々をエンパワメントし続けるために今後何をするか。</li> <li>■ 自分の遺産を定義することを含めた長期的計画は何か。</li> </ul>
このセッションの主な学びと成果	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● エンパワメントを完全に実現する為には、知性、直感、発想力、インスピレーション、無邪気さを組み合わせる必要がある。</li> <li>● リーダーは問題を解決し、個人的にもまとまりとしても人々をエンパワーする為にコミュニケーションの段階に気付いていなければいけない。</li> <li>● 就職するために必要なレジユメに書くスキルや特徴は、人間が死んだ後に語り継がれるものとは異なる。</li> <li>● エンパワーするリーダーであり続ける為に興味と共感を用いることは YE コースの全メンバーが目指すゴールである。</li> </ul>	

#### 4. ファシリテーターのコメント

2016年度のYEコースに集まった感情豊かなリーダーたちは、SWYの旅をお互いへのサポートと信頼を誓い合うことからスタートした。本レポートでは、YEコースのディスカッションの中で共有されたPY自身の物語を通して、彼らの学びを検証したい。

あるPYは、彼女が患ったがんについて共有した。3歳の時から10年間にわたる闘病生活を経てがんを克服した経験を語ることで、他の参加青年をエンパワーした。彼女は、彼女の生存を最優先に考える両親のために、自分の思考や感情と向き合うことや、たくさん質問を投げかけることをやめた。献身的に彼女を支え続ける両親に対していつも「聞き分けの良い子」でいることを心がけた結果、自分の本当の気持ちを両親と共有することがで

きなくなっていた。YEコースのPYが、だれもが心を開いて正直に話ができる空間づくりを心掛けたことにより、彼女は安心して自分自身の経験や考えを表現することができた。コースのPYの心がつながる瞬間となった。

これはエンパワメントについて大切な教訓を含んでいる。エンパワーする過程において、Invitation（その空間に招待し、心を開いてもらうこと）は不可欠である。彼女が自身の話を打ち明けたことにより、他のPYたちも、自身の人生における苦悩や、無力を感じる瞬間について語り始めた。自身がありのままであることを妨げる差別や恐怖を、どのように乗り越えようとしているかについて共有した。それぞれの話の中で、家族や友人、同僚や教師が、それぞれの人生においてどれほど素晴らしい価値を与えてくれたかについて触れた。私「たち」の価値が強調された。

あるPYは、自身の海外在住体験と自国についての話を共有した。彼女はありのままの自分であることができないと感じていた。外国でも、また、彼女が自国だと思っている場所においても、いつも自分とは誰なのかを見出そうとしていた。いじめられたり、のけ者にされたりし、自分は何を信じ、自分の国とはどこなのかと自問しながら、彼女はこういった体験が自分をエンパワーしたことを共有した。

あるPYは自国で障害があると見なされながら成長したことについて共有した。彼は自分に障害があるとは思っていない。この自然に生じた「障害」のために、人々がどのようにひどい目に遭ってきたかについて話した。このPYは同じような状況で生活している人々、特に地方にいる人々を支援するための団体でボランティア活動をしている。

あるPYはクォーター制（割当制度）及び、自国では人種によって学生が区別されることについて共有した。学生には公教育の機会が与えられるものの、多くの学生にとってこれはエンパワメントにはなっていないと述べた。そのため、最低限の不平等な教育を受けることになり、この制度はしばしば失敗に終わっていることを人々も認めてきた。

あるPYは自国がもっと多様性に対してもっと寛容になり、多様性が強みであることを認めてほしいと述べた。自国のことだけではなく、もっと多様性を促進してほしいと言った。

あるPYは先住民について差別的な発言をしながら育ったことを恥ずかしく思っていること、それらは事実無根だと知っていることについて述べた。彼は自分の無知に気付いていた。

あるPYは自分が訪れたフィジーの村の人々がいかに幸福であるかに驚いたと述べた。たいいていの人には仕事がなく、公教育はほとんど受けておらず、持ち物もほとんどなく、それでも彼らは楽しそうに見えた。彼女は私たちに幸せにしてくれる事柄で自分たちをエンパワーするようにと勧めてくれた。

自分の話を聞いてくれる人と感情面での絆を作ることが、人々を結びつけるための鍵となる。教えるにしろ、聴くにしろ、感情的な絆を共有することは共感を呼び、エンパワーできる。

YE チームはダイヤモンド・ルールを設けた。「共に分かち合い、互いにとって益となる関係性を構築することによって他の人のためになることをせよ」 エンパワーするためのこの細やかな感性を表現するためにこのチームは「私たち」という単語を用いた。

エンパワメントとディスエンパワメントについて、個人と地位による権力を通じて話し合った。個人の力（personal power）、つまりあなたの個性を用いて他の人をエンパワーすることは、リーダーになるための鍵であ

る。人が決定するために地位の力（階級、体力、知識、あるいは、mean-spiritedness）を用いる時、他の人を絶対に従わせようという一方的な話は、人をディスエンパワーさせる行動である。個人の力（personal power）を持つ者が語り、聴き、共有し、エンパワーすることには非常に重みがある。地位の力（positional power）を持つ者が他の人をディスエンパワーするなら、それは独裁的である。この言葉の違いは大きい。

YE チームがエンパワーされたことを思い返し、共有することは大切である。「早く行きたかったら一人で行きなさい。遠くまで行きたかったら、みんなで行きなさい」

ある人が落ち込んでいる時にその人を評価しないことがいかに大切かについて、あるストーリーをチームで共有した。家族や友人、同僚のサポートを得られる幸運な人であれば、他者からの支援や他者への信頼のゆえに、落ち込んでいる期間はすぐに大喜びの時になるものだ。ある人の個性を評価する一番良い時とは、その人が他者に対して地位の力を行使している時である。その力が体力的、感情的、法的（法律上の）、階級的、経済的、技術的、あるいは精神的なものであれ、力の関係において同じレベルではない他者を扱う方法を見れば明らかになる。このような普通とは異なる共有方法や支援と信頼のおかげで、PYはエンパワメントの目標を共有できた。PYは、ある人が亡くなった際に語り継がれる個性と履歴書に記載する個性との違いに気付くように促された。人が覚えている事柄とは、通常は、就職活動をしている時について話すような普通の事柄ではないのである。

最後に共有した事柄は、コースのセッション中に検討した多くのコンセプトを説明するものだった。PYはますます拡大するクモの巣と「私たち」の可能性を認識するようになった。個人主義、つまり、相互につながり合うことや相互に自分たちのコミュニティの人々を支え、信頼することを受け入れるようになった。

YEのメンバー全ては他の人をエンパワーし続けるためにどのように自らをエンパワーするかについて話し合った。彼らは自身と社会の可能性を高め、より良い未来のために貢献することができる、好奇心旺盛で共感力に優れたリーダーたちである。これから彼らが暮らす場所がどこであろうと、どんな道を選ぼうと、無限の可能性を持つそのスキルによって、きっとすばらしいリーダーとなってくれるだろう。

.....

## 5. 参加青年の感想

栗林文（日本）

私がこのコースを志望したきっかけは、次世代を担う一人の若者として、周囲にいる仲間を巻き込み、より良い社会を造っていく過程で人々をエンパワーする方法を学びたいと強く思ったからでした。

ディスカッションでは、「自分がこれまでどのように人をエンパワーしてきたのか」あるいは「エンパワーされてきたのか」という大きなテーマのもと、ユースである私たち自身のこれまでの経験をもとに、対話を重ねていきました。回を重ねていくうちに、様々なバックグラウンドを持つ参加青年たちが徐々に心を開き、互いの人生に寄り添いながら対話をすることができる、とても安全な環境が作られていきました。

そして、最大のエンパワメントとなるものは、周囲の

仲間と共に生きているという事に気付くことだと学びました。ディスカッションの中で、メンバー同士が互いに尊敬し合うことを忘れず、信頼し合い、助け合うことを自然と共有できたことがコースメンバー全員にとっての誇りであり、このコースが自分の居場所なのだと皆気付くことができたと思います。エンパワメントは、単なる手法では表現しきれないことであり、周囲の仲間とともに生きていることに気付くという、とてもシンプルな考えから始まるものなのだと学びました。

## 4 サマリー・フォーラム

### 目的と概要

2月28日に開催されたサマリー・フォーラムは、本事業の中で最も重要なイベントの一つである。234人のPYは事業期間中、六つのコースに分かれてそれぞれ異なるテーマについて学ぶため、サマリー・フォーラムではコースを越えて情報共有をした。本フォーラムは各コースの主な学びを全PYと分かち合う、またとない機会となった。各コースのプレゼンテーションは、パワーポイントの発表だけでなく、寸劇、音楽、映像などを交えて行われ、観客を楽しませるとともに、効果的に学び

を共有することができた。

学びの集大成である本フォーラムに参加することで、PYは、共通のテーマである「青年の社会貢献」について、他のコースがどのように学んだのかを理解する機会を得た。また、自身のコースの発表を通して、コース・ディスカッションで得られた学びを振り返り、その学びをどのように社会貢献に役立てることができるのかを明確にすることができた。

### コース発表内容

#### ■ダイバーシティ推進とインクルーシブ社会の実現コース

DIコースの発表は、四つのアクティビティで構成した。まずPYに一列になってもらい、自分自身の母国語、人種、経済状況などに関する10個の質問を投げかけた。それぞれの質問に対して、「イエス」の場合は一步前に進む（あるいは質問内容によっては一步後ろに下がる）という、特権散歩というアクティビティをおこなった。一直線だった列から、質問を重ねるごとに、一步前に出るPYや後ろに下がるPYがいて、集団の中でお互いがどのような違いを有しているかを視覚的にとらえることができた。次に障害者、ジェンダー、人種などをテーマに劇を披露した。劇は、マイクロアグレッション（日常で知らず知らずのうちに人を傷つけてしまうような、多様性への配慮に欠ける言動）を題材にすることで、ふとした瞬間に起こり得る偏見や差別に気付いてもらうきっかけをつくった。三つ目は、ステージでDIコースのメンバーによるスピーチを行った。個人のバックグラウンドとコース・ディスカッションを通じて得られた学び、そして自分のコミュニティにどのように還元していくかをテーマに発表した。私たちはインクルーシブ社会を大きなテーマとして捉えるのではなく、目の前の人を尊重し愛することで人々が快適な環境で暮らし、多様性を受

け入れて一緒に生活できる一步になるのではないかというメッセージを送った。最後に、Diversity and Inclusionをテーマにした歌をメンバー全員で歌った。コース・ディスカッションメンバー全員がサマリー・フォーラムに参加し、何かしらの役割を担うことができた。内容に対して、それぞれが自分の意見を反映させることができた内容となり、まさにインクルーシブなコミュニティの実現を実現する機会となった。

#### ■平和構築のための対話型アプローチコース

プレゼンテーションは、「平和構築のための対話型アプローチ」についての導入として、次の質問をオーディエンスの参加青年たちに投げかけることから始まった。「例えば人と違う意見を持ったときなど、船において問題や困難に直面したとき、どのようにそれらを解決しますか？」そして発表者は、この問いへの最も一般的な答えは「対話」であるだろうと述べた。

プレゼンテーション全体の概要は、三つのパートで構成した。最初のパートでは、発表者は対話というものは、ただ話すだけではなく、批判せずに相手の言うことを聞いて受け入れ、さらには他の人々が発言したり、本当に



話したいことを話せるように促すことでもあったと説明した。さらに、コースの何人かのメンバーがステージに上がり、私たちがコースに導入した「エンジェルシステム」を説明した。「エンジェルシステム」は、参加青年同士でペアを作り、自らの話や心配事を聞いてくれる人を一人ずつ持つ活動であり、発表者は、このシステムによってそれぞれにとって安全な場所がどのように築かれ、それがコースの発展や、自分の考えを率直に語るができるようになるといった参加青年の個々人の成長をどのように助けたのかについて説明した。

第二のパートでは、短いロールプレイが行われた。そのロールプレイでは、異なる意見を持つ二人が言い争っているところにミディエーター（仲介者）が現れ、ミディエーション（仲裁）を行うことで、両者が満足する形で衝突や争いが解消される場面を再現した。その後、発表者はミディエーションの方法について、それがどのように機能するのか、また対話を可能にするための方法としていかに重要であるのかを解説した。

最後のパートでは、劇によって発表が行われた。漁師が暮らす村に、漁場の全ての魚を獲ろうとする他所の漁船が現れる、という設定で劇は行われた。元々その土地に暮らす一人の女性は、漁船を追いつ追いつと説得を試みるものの、彼女一人では説得できない、という場面から劇はスタートした。そこで彼女は自分以外の地元の人々に話をしに行き、助けを求めた。彼らの助けを借りて、平和的（武力や言葉の暴力に訴えない）な抗議をすることにより、漁船の漁師たちとの対話の機会を持つことができたところで劇は幕を閉じた。劇の後に発表者は、対話は地域レベル、国家レベル、そして国際的なレベルでの問題を解決するために重要であることを強調した。

プレゼンテーションの最後には、短いスピーチによってこのコースでの主な学びについてのまとめを述べた。スピーチでは、対話の重要性、対話が持つ影響、そして自分の家に帰ったときにそれがどのように参加青年自身の日常生活で対話が有用であるかについて発表し、サマリー・フォーラムを締めくくった。

### ■ 防災活動のための人材育成コース

「災害とは何を意味するのか」「災害が起こったときに最初に対応すべきなのは誰か」「いかにして災害の影響を減らすことができるか」「そして我々一人一人がコミュニティの防災力向上に対して、いかに貢献できるだろうか」。防災活動のための人材育成コース（DRRコース）の発表者は、聴衆に対してこのような質問を投げかけるところからプレゼンテーションを開始した。

発表内容がDRRコース概要の流れに沿うよう、セッションの実施順に、参加青年が何を学んだのか、また、東京（日本）・オークランド（ニュージーランド）・スバ（フィジー）での課題別視察が、いかにそれまで得た

知識を裏付けるものとなったかを説明するようプレゼンテーションを構成した。また、各セッション毎に担当する発表者を替え、このコースに参加して得られたものをDRRコースの全員がメッセージとして発信できるように工夫した。

プレゼンテーションは、セッション1で学んだ「災害とは、その誘因による影響が対応能力を超えた現象のことを言う」という説明から始まった。発表者は自然災害と人為災害の違いについて示し、なぜ災害について議論するのか、災害リスクを減らすことがどうして必要なのかについて説明した。また、災害に備えることや被害を抑えることがいかに大切なのか、どのような災害リスクが存在するのかについても述べた。さらにセッション2で学んだ、防災におけるステークホルダーや、市民社会組織（CSO）・企業・行政の役割の重要性、特に地域コミュニティの巻き込みが大切であることについても触れた。

次に、東京での課題別視察先として訪問した国際協力NGOセンター（JANIC）及び防災・減災日本CSOネットワーク（JCC-DRR）での内容、そして池袋防災館で震度7の地震を疑似体験した様子を撮影したビデオを上映した。

続いてセッション3の内容である避難計画に関して、コミュニティ主導のハザードマップを作成した経験の発表に移った。にっぽん丸を参加青年が住民として暮らす島と仮定し、津波の脅威から住民の避難計画を立てるといふ、災害想像ゲーム（DIG）という手法及びその実施過程が地域の災害対応能力を高める様子について説明した。

また、それまでのコースでの学びを実践する機会となった、オークランド市の民間防衛・緊急事態管理センター訪問についても触れた。ここでは津波発生まで1時間という警報発令の想定のもと、連携インシデント管理システムの枠組みを疑似体験した結果について発表した。

次にセッション4の内容であった、支援者から被支援者に提供される人道支援の質と説明責任について解説した。ここで触れた、コミュニティへの支援を適切なタイミングで実施する方法や、長期的に害を及ぼさないことについての学びは、その後に災害時の迅速な対応を主な目的とするフィジー赤十字社を訪問した際に、非常に役立ったことについても触れた。さらに、フィジー赤十字社の概要及び活動内容、そして参加青年が学んだことを映像にして上映した。

コース最後のアカデミックな学びとなった、セッション5で扱ったアントノフスキー博士によるストレス対処理論についても発表した。発表者はこの理論について解説し、災害後にはトラウマを引き起こす理由の代わりに、幸福感をもたらす理由について焦点を当てるということがいかに大切か述べた。

最後に、本コースで学んだ内容のうち、自身にとって最も価値を見出したものについて、全員が一言ずつ話す

様子を撮影・編集したビデオを上映して、プレゼンテーションを締めくくった。

### ■国際貢献活動コース

サマリー・フォーラムのプレゼンテーションは、一人のOPYによる全般的なICグループの活動についての説明に始まり、その後ICグループにより作成されたオリジナル動画の上映を行った。動画中で、International Cooperation、SDG (Sustainable Development Goals) とは何かについて、説明が行われた。

その後、プレゼンターが、日本における課題別視察に関して、訪問したJICAトレーニングセンターと国際的NGOであるOISCAの活動について、口頭での説明を行った。続いて、ニュージーランドにおける課題別視察で訪れた、団体 (GreenPeace、Refugee ActionNetwork (RYAN)、FairTrade、AIESEC) の活動について、また、フィジーにおける課題別視察に関する説明を口頭で行った。特にフィジーにおけるJICAプロジェクトについては、既に50以上の事例がある、村のコミュニティにおける水の浄化・供給システム施設 (EPSシステム) の普及プロジェクトについての説明を行った。また、JICAボランティアにより支援、運営されている、廃棄物から肥料を製造する、ラミ市におけるコンポストプロジェクトについても紹介を行った。

最後のプレゼンターは、世界をより良くするためのSWY29参加青年一人一人の責任についてリマインドを行った。最後にICコースメンバーがステージ上でWe are the worldを合唱し、総括としてICグループからのメッセージをPYに強く発信した。

### ■責任あるツーリズムコース

責任あるツーリズムコースでは、5回のレクチャーで何を学んだか、寄港地で訪れた場所の紹介から始まった。私たちは今船に乗っていて、クルーズツーリズムのツーリストとして学びながら実践をすることのできるコースであるという主張とともに「あなたは責任あるツーリズムについてなにか知っているか?」「責任あるツーリストになるために私たちは何ができるか?」の二つの質問を投げかけインタビューを行った。

次に、責任あるツーリズムとは、住む人々のために、訪れる人々のためにより良い場所を作ることであると定義した。それぞれのPYの出身国で起こっているツーリズムの問題点、そしてコース内で話し合った解決策の一部を発表した。食べ残し、水や電気の無駄遣い、ゴミに関する動画を放映し、視覚的に全体へ呼びかけた。それぞれのビデオの後に船のクルーから得た情報をもとに、食べ残しと使用した水の総含量・一日当たりの量・一日の一人当たりの量がどれだけあるかを発表した。電気の使用量に関してはデータを得られなかったが、船上で使

われている電気の全ては燃料から作られているため、私たちの電気使用量は燃料の消費量と大きく関係していること、そのために電気はできるだけ節約しなければいけないことを主張した。ゴミに関してもどのように船上でゴミが処理されているのかを説明し、最小限にゴミを減らすことの大切さを言及した。最後にコースから3名にまとめを発表してもらい手を擦って音を出し、一人一人のすることは小さい (手をこすっても音は響かない) が、全員が協力すれば大きな影響力がある (みんなで手を擦ると音が大きくなり遠くまで聞こえる) という例を挙げ、発表を終えた。

### ■青年のエンパワメントコース

プレゼンテーションは、幕が閉ざされ、コースのメンバーが壇上に上がっている状態から始まった。エジプトの参加青年の言葉から始まり、彼の読む詩と日本参加青年のビートボックスが会場を包んだ。詩が終わると同時に、青年のエンパワメントコースのメンバーが立ち上がり、「ユースエンパワメント」と声を上げた。その後、2名の参加青年が壇上に上がりコース活動を振り返るスピーチをした。彼らは富士山がどのようにして人々に影響を与えてきたのか、ゴールデンルール、プラチナルールとそれらのルールとコースのメンバーの考え方を併せた独自のルールである、ゴールデンルールについて言及した。その後、自分に関する物事をつなぎ合わせると、他の人とどんどんつながっていくという、スパイダーウェブに関しての説明があり、「他の人をエンパワーするために、まず自分をエンパワーすることが大事なことである」と締めくくった。

2名の発表者が壇上から降りた後、一人の日本参加青年が自分の人生のストーリーをシェアするために壇上に立った。彼女は子供の頃から、深刻な闘病生活をしてきたため、外で遊ぶことができなかった。ついに病気を克服したが、長い闘病生活により、自分を閉ざしてしまうようになった。その上、自分がやりたいことが何であるのか見つけられなかったのだ。しかしながら、彼女はコースを通してメンバーにエンパワーされ、行動を起こすことの大切さをサマリー・フォーラムの場でスピーチすることを決心し、壇上に上がった。

その次の発表者は、壇上では青年のエンパワメントコースで学んだ教訓に基づき、全ての人々が同じポジションにいるのだということを示すために、ステージの端の座りながらスピーチをした。そして、先ほどの参加青年が大勢の観衆の前で人生のストーリーをシェアしたことは勇気のある行動であると述べた。

続いて、コースでの経験を述べるために、別の日本参加青年が壇上に上がった。そこで、いかに初めは自信がなかったか、そして青年のエンパワメントコースに所属することで、彼がどう変わったのかについて発表した。また、

コースの環境が自分にとってのセーフティゾーン（安全地帯）であると述べ、メンバーやファシリテーターへの感謝の気持ちを表現し、スピーチを締めくくった。

次に、コースの活動を紹介するビデオを参加青年のギ

ターと歌声に乗せて流した。

曲が終わると同時に、メンバー全員が壇上に上り手をつないだ。そして「SWY29」の掛け声が続いて、「あなたを応援し、信じています」と叫び、発表を終えた。

## 異文化理解セミナー

異文化理解セミナーは、以下の成果をねらい、全参加青年が参加するセミナーを3回実施した。

- 異文化に触れた際に、その文化を尊重し、敬意をもって対応できる姿勢を身に付ける
- グローバル社会におけるどのような場面においても、

異文化理解とそれに必要なコミュニケーションを実践ができるようになる

- グローバルな文脈で俯瞰的に自身の文化、文化的アイデンティティを認識できるようになる

### 1 異文化理解セミナー I

#### このセッションの目的

ハラスメントとはなにか？人がハラスメントだと思った発言や行動を言う。SWYの現ルールは全員の文化に則ってある。

文化とはなにかについて簡単に概観し、人生においてまた船の上においてその文化がどのように中心的な役割を担うのが発表された。

このセッションは異なったバックグラウンドを持つ人々と船の上でどのように行動するかを教えることが目的である。また社会奉仕に携われるように国際協力の精神を養うことも目的である。さらに、セミナーを通して

異文化理解を深めていき、自身に関係のある話題について話をさせることで参加青年の理解を促進し、お互いの文化の違いを受け入れ、全ての考えを尊敬する。

このセッションは代表たちにハラスメントとなるような受け入れられない態度などのミスを犯した際に謝ることを教える。PYに世界は多様性に富んでいることを気付かせ、異なる国から参加しているPY同士の船上での将来的な誤解を防ぐ。最後に、このコースでは、上記のような目的を通した同じコンテンツを共有することで、全員が共通理解を得ることができる。

#### 内容

講義は文化の定義から始まり、船上でバックグラウンドの異なる人々と良い関係性を築くための広い範囲のトピックを含んでいた。

##### <第一部>

- 文化とは生まれつきではなく習うものである
- 固定概念の役割
- 私たちは異文化理解コミュニケーションをもっている
- 文化の氷山について
- 固定概念イメージのリスク
- 文化の違いは誤解を生むかもしれない
- 個人間の関係と文化を越えた誤解を正しい方向へ導く

##### <第二部>

- JPYとOPY両方を含んだ4人グループを作り、ワークショップを行う

- 相手の国々の文化について思い浮かんだイメージについて話し合う

##### <第三部>

- セクシュアルハラスメント、アルコールハラスメントなどに注意
- 大事なのは自身の意図ではなく、相手の感覚である
- ハラスメントは文化によって異なる
- 他の文化や宗教の人々と直接話すことの重要性
- 他の国のイメージが限られているときは、必要なら好ましくない感情や混乱していることについて説明すべきであり、異なる国から来た人々と直接話すことによって彼らをよく知る方が良い
- 周りの人が不快に感じているかどうか尋ねるべきである

## 主な学びと参加青年からのコメント

異文化理解の成功は様々な文化を意欲的に学び、相手の身になって物事を考え、そして尊重することを基礎としている。この成功は、類似点や相違点を大切にすることで達成されるもので、最終的に文化のカバンを取り外すことにつながる。文化のカバンというのは、彼らが彼らの文化を基盤に相手の文化に対する、無意識のうちに言う考え方や、話、振る舞いの中に見ることのできる傾向のことである。この傾向は異文化理解が目指す見方とは真逆の、固定化された世界の見方につながる。

ステレオタイプは、私たちの主観のみで形成される。実際、私たちは相違点を持っていてもみな平等である。その相違点によって私たちは特徴づけられ、私たち自身であることができるのだ。

ステレオタイプは強い影響を持ちうるので、相手の文化を知っていないと、コミュニケーションを取るのが、大変難しい。それゆえ、異文化理解を学ぶことが私たちにとってとても重要であるのだ。

自らの価値観で、相手の考え方や価値観を受け入れるか判断しても良いが、他者の考え方を尊重しなければならない。相手への尊重を保てる状況であれば、自らの考え方や価値観を自由に言ってもよい。

全てのPYが同じ様にカルチャーショックを経験するわけではないと思う。私達全員がその危機を経験するとは言いきれないかもしれない。

題材はよりオープンで話し合いがなされ、実践的な活動を通して個々のものの見方の限界を拡大する必要がある。文化を超えた結婚式、食べ物やジェンダーの期待などの日常的なことを少人数に分かれて話し合ったりすることが例に挙げられる。

ほとんどのOPYに適用できるものであっても、全ての人に当てはまるわけではないし、特にLGBTのテーマを扱うのは簡単ではないので、理論やアプローチの仕方、内容などを深める余地があるのではないかな。

## 2 異文化理解セミナー II

### このセッションの目的

異文化理解セミナーの第二回目の目的は、違う文化の人々と暮らすことがどのように自身の心と目を開かせるかということを示すことであった。また、ホフステッド氏のモデルに基づく異文化理解の基本的な理論を理解することや、知能指数 (IQ)、感情指数 (EQ) や文化指数 (CQ) の違いや重要性について議論することといった「派生的な狙い」も、本目的に含まれている。これらは全て、他者の価値観や考え方、規範がどこから来ているのか理解

することにより、異文化間コミュニケーションをいかに高めていくかを示すために使われている。この学びを通じ、仕事の場面や個人的な場面どちらにおいても他の文化とうまくコミュニケーションをするよう心を開くことができるだろう。本理論の土台は、より広い文脈、すなわちセミナー全体におけるフレームワークとしても機能するだろう。

### 内容

セミナーはクレイグアドバイザーからのいくつかの逸話で始まった。これらが議論内容の背景の導入となった。その後、Benettの文化の定義、そして文化を創造する際の価値観、態度、規範が及ぼす影響を再度確認した。次にIQ, EQ (感情指数), and CQ (文化指数) が説明された。文化指数とは文化的背景をどれだけ受け入れるかということである。続いて以下のHofstedeの文化的側面が、セミナーで中心的に説明されたものである。文化はこれらの側面を用いて大きく分類することができる。この理論は異文化理解において基礎となり、後に異文化比較にも用いられた。この理論モデルは六つの側面を持つ。それは権力の差、個人主義、男らしさ、不確実性の回避、長期主義、そして快樂的か禁欲的かである。

#### 権力の差

権力の差とは、組織、機関や社会生活において権力が不平等に分配されていることを権力が弱い人々がどれだけ受け入れているかということである。しかし、多かれ少なかれ権力の差なしに存在する国はないだろう。例えば、日本は54%でウクライナは92%で、大きな文化の違いを示している。

#### 個人主義と集団主義

全員が自身のこともしくは自身の所属する物や家族にだけ注意するという意味における個人主義という言葉と、団体の人々がグループワークにおいてともにある集団主義という言葉には大きな違いがある。セミナーを通

して、二つの言葉について異なる国が違った割合を示した。例えば、日本とウクライナはかなり違っており、それぞれ日本が46%のところウクライナは25%である。

#### 男性らしさと女性らしさ

この二つの言葉は個人よりも感情的な性別役割に注目している。より男性らしい国々があるが、それはたくましく、はっきりしていなくてはならないとされる男性による支配やより重点をおいているかによって特定される。一方女性は謙虚で男性に支えられることによって特定されると知られている。他方、女性らしい国とは両性別の役割を持ち謙虚でサポートをするかどうかによって特定される。例として、男性らしさと女性らしさの比較の顕著さは、日本は95%だがウクライナでは27%である。

#### 不確実性の回避

国によって不確実性の回避率は異なる。不確実性の回避とはあいまいな状況により危機を感じるなど、不安を

感じる個々の感覚を示すものである。日本とウクライナの比率を例に挙げてみると、ほぼ同じで日本は92%、ウクライナは95%である。

#### 長期主義

ここでいう長期主義とは、文化がどのように時間に基づく価値を形作っているかということである。価値や行動は現在または未来に恩恵をもたらすのか？2670年もの日本帝国の歴史の現れなのか、日本は88%と高く、一方ウクライナは55%と中間に位置している。

#### 快楽的か禁欲的か

快楽的であるということは満足感を得ようとする傾向が強いということである。つまり、自身の要望を満たすことで喜びを感じるということである。社会で求められる行動や要望等の制限事項により快楽感は制限される。ウクライナは18%と低い値で、日本は42%である。

### 主な学びと参加青年からのコメント

主な学びは上記の目的の中で述べられている。今回のセミナーからの主な学びは異なる文化から来た人々と生きることがあなたの心と目を開かせるかということに関わる。これを示す方法はホフステード理論であった。セミナーの狙いはよく達成され（主な学びになっている）、セミナー全体の成功を示している。しかしながら、下記は異文化理解委員会のメンバー全員からのコメントとフィードバックである。

- 多くの参加青年はこれまでのところ異文化理解セミナーを、最高のセミナーの一つとして報告している。そして講師のこのトピックの理解は、大変評価されている。
- ディスカッションや参加青年の間で共有された経験は、大変役に立つもので、参加青年によってよく受けとられている。また、理論や、講師によってプレゼンされた主なアイデアを理解するために高く評価された方法であると認められていた。
- 発表者は発表の間、彼自身の行動をととても意識していて、聴衆の反応によって彼の口調や語彙を適宜調整していた。

- 講師は異文化理解文化において豊富な経験があるので、講義内容が講師個人の異文化理解分野における経験とより多く結びついていけば、より価値のあるものになったであろう。
- 国別のデータの話をする際、より詳しい構成やデータ結果に結び付く事例や異文化理解の鍵となる概念の説明があればより良かった。
- 講義内容は大変有効で興味深いものだったが、船上研修中の生活の中で適用する機会があればもっと良かった。
- スライド内の言葉が多く、話も長く感じられることがあり、PYが理解しにくいことがあった。スライドにはキーワードや鍵となる概念を箇条書き方式で示すとより興味を引く内容になるのではないかという声があった。分からない単語を事前に調べられるので、講義で使う資料を事前にPYがもらえると良い。
- 講師が話す内容に複雑な単語があったり、話すスピードが速かったりすることがあった。PYに合わせて話すスピードを遅くするなど、プレゼンテーションの中でPYが理解しているか確認をするとよい。

### 3 異文化理解セミナー Ⅲ

#### このセッションの目的

1. 前回のセッションで行ったアクティビティで得た結果について報告と議論
2. 過去に学んだことのコンセプトとセオリーの要約
3. SWY から帰国後、現実世界に帰ったPYの助けとなる技術を得る
4. PY が家に帰った時に直面するチャレンジについて理解する
5. SWY で得たことについてのコミュニケーションで必要なスキルを得る

#### 内容

このセッションは最後のセッションで委員会のメンバーが開いたQ&Aの結果、ショートプレゼンテーションから始まった。トピックはお酒について、時間厳守、力関係、教育、そしてインフォーマルな場での関係性が各国の文化でどのように影響しているかである。この結果はグループ内討論と、結論をみんなにシェアしたことに基づく。PYはこのアクティビティの結論がそれぞれ自分の国に当てはまっているかどうかを考えた。

講義が始まるとすぐに、能力とは何か、そしてその発段階についての議論を行った。端的に言えば、能力というのは、何かを上手くやるための力のことである。最初は皆、できないことにさえ気付けない段階にいる。この段階では、何が分からないのかさえも理解できない。次の段階が、できないことに意識を向ける段階である。この段階に来ると、自分の無能に気づき、能力を身に付けたいと働きかける。そして、自分の意識を向けることができる段階がやってくる。できるのではあるが、その実行のため、行為に注意を向けすぎる。クレイグ先生は、このことを10代が車を運転することに置き換えて説明した。クラッチを握って、ブレーキから足を離すと同時にアクセルを踏むというように、最終的に、無意識にできるようになる。その段階では、考えることなくできるようになる。このことは朝、無意識に支度をしていることと同じようなものであると説明した。

その後、これまでのセミナーで扱った全ての概念を以下の順で要約した。文化の基礎（価値観、態度、振る舞い、ステレオタイプ）、文化の氷山（人が見ているのはその文化の10パーセントにすぎない）、異文化理解のためのアドバイス、そして最後に、Hofstedeによる六つの文化的側面である。

クレイグ先生は彼が生まれた当時の「宇宙世代」を私たちに思い起こさせた。彼は宇宙飛行士の物語を使って、SWYを宇宙船と見立ててPYのこれまでの旅について説明した。始めは選考過程があり、次にミッションが承認される（事前研修）。クルーとの交流を深めること（デリゲーション内の結束）、そして離陸！一度船に乗れば、

ハニムーン期間、そして危機が訪れて（船酔いやインフルエンザ）。これらに対応する形で、調整や回復期間もあった。これらが意味するのは、PYがこれらの危機に直面した際、これらの困難を克服するために新たな環境に順応しなくてはならないということである。最初の段階は、誰もがただお互いの文化、つまり新たな困難について学び始めた状態である。クレイグ先生は、次の困難な時期、自身の文化だけでなく他人の文化に適應する時期のことを冗談交じりに「異文化の達人」と話した。宇宙旅行の第二から最終ステージは減速過程である。ここが今まさに私たちがいる所であり、日本に近づくにつれて、荷造りをしたりレポートを書いたりするのだ。大気圏に再び帰還する際、宇宙船は燃えないためのシールドが必要になる。これはPYにも当てはまる。SWYを通して、私たちの価値観、態度、規範は変化しただろう。PYが自国に帰るとき、彼らは「逆カルチャーショック」に直面するだろう。自分が元々所属する文化に戻った際、そこは全て同じままであったとしても、自分たち自身が大きく変化しているのだ。この変化に対応するために、PYは特有の異文化理解をする必要がある。

第一に、PYは帰路についた際に個人的に直面するだろう課題を認識する必要がある。第二に、SWYでの経験（コミュニケーションを通して）人々が理解する助けを担う必要がある。これらの「再スタート」のための二つの能力は、次に述べるアクティビティを通して養われた。

最初に、PYは日常生活に戻ったときに直面するかもしれないのはどのような課題か、また、こうした課題に対し可能性のある解決策は何かについて考えるように求められた。議論とブレインストーミングはデリゲーションごとに行われ、最後にグループごとにステージでその結果を発表した。ファシリテーターが全ての大陸が発表したことを確認したあと、同じグループにて、プログラムが終了して帰国した際、SWYに関してどのような質問をされる可能性があり、その質問にどのように答えるか、デリゲーションごとに考えるように指示された。

5分間の議論のあと、グループでその結果をステージで発表した。その結果は、PYは、自身が元いた文化に戻っ

た「再スタート」の後、すぐに直面するであろう課題をどのように克服するかを理解を深めた。

### 主な学びと参加青年からのコメント

今まで発表された内容の全てを復習したことで、参加青年は知識を深め、これまで説明されてきた内容がいかにつながっていたかという全体論を理解することができた。それはSWYの事業全体としての良いまとめとなった。また、委員が前回行った活動のデータの分析結果の発表は、参加青年の間での良いディスカッションをもたらした。特に時間厳守のトピックでは、幾つかの国は時間厳守についてとても異なる見方を持っていた。そして、私たちは様々な文化を通して、同じトピックでも多くの異なる見解が出てくることを理解した。

私たちは、二つの理由でセミナーのねらいが達成されたと信じている。まず、発表者は、SWYのようなプロ

グラム終了後、家に帰ったときにどのように、この事業の内容、理論や挑戦について説明したらいいかを学んだ。次に、グループ活動をしたことにより、参加青年は何が挑戦になり、彼らの国に到着したとき、何が可能な行動計画になるのかを先取りして考えることができた。家に帰ったときに、どのようなストレスに直面する可能性があるか、その源を理解して話し合うことは参加青年にとってとても役に立った。また、これは参加青年が日常生活に円滑に戻る際の一助になるだろう。グループ活動については、話し合いや発表を終えることができないほど盛り上がったので、もっと時間をかければ面白くなったであろう。

## リーダーシップ・セミナー

リーダーシップ・セミナーは、以下の成果をねらい、全参加青年が参加するセミナーを4回実施した。

- グローバル社会において、リーダーとして活躍するための心構えを身に付ける
- リーダーシップの概念や、グローバルな環境で必要と

されているリーダーシップのスキルについて整理し、理解できるようになる（調整力、公平性など）

- 事業での経験をいかして、自身がグローバルリーダーとしてそれぞれの現場で活躍できるような能力を養う

### 1 リーダーシップ・セミナー I

#### このセッションの目的

リーダーシップは時代とともにその概念が変遷を遂げている。本来、リーダーシップとは誰もが持っているものであり、あらゆる場面で個人個人がそれを発揮しうる。そしてそれには四つの側面があり、我々はそれを使い分けながら生活をしている。本セッションでは、そのリーダーシップの概念とは何かを理解し、それぞれがリーダーとして様々な経験の中で自分たちのできなかったことをできるようになるよう努力をし続けることが大事であると知ることが目的である。それらを理解するために、少人数でのディスカッションを通して、各々が持つリーダーシップを発揮した経験を共有することによって、自分がどの側面からのリーダーシップを発揮することが多

いのかの気づきを与えるきっかけの場とする。

また、実際に体を使ってリーダーシップが持つ四つの側面を表現しながら、その役割を確認することで、このセミナーの目的であるリーダーシップについてより概念を深め、全参加者が共通の認識を持って今後の議論を進めていけるよう、根本的な部分の理解をする目的も本セッションは担っている。

座学の講義だけではなく、積極的にJPYやOPYが意見交換をする機会を設けることで、リーダーシップにおける多様性をお互いに知り、リーダーシップが持つ役割を多方面から理解していくきっかけを与えることが本セッションの目的である。

アドバイサーの青木聡美先生から御自身の紹介後、概要説明があった。第一回目となる今回のセミナーは「リーダーとしての学びの道 ～リーダーシップとは何か～」というテーマで進められた。

### 経験に基づく学び

青木先生はまず「経験に基づく学びの過程」とは何か、四つのステップで解説してくれた。

1. 何ができないのか分からない
2. 何かできないかを知る
3. 意図的に行う
4. 自然にできるようになる

2から3への過程の間、最初は失敗をしていますが、何度も繰り返し行うことで4へと到達する。

青木先生はこの解説の後「あなたはこのプログラを通じて何をもち帰りたいか」という問いを投げかけ、PYはペアを作り、話しあった。

### リーダーシップのパラダイムシフト

青木先生はリーダーシップが今後どのように変化していくのか、比較の図を用いて解説してくれた。従来、リーダーシップは地位や権力に帰属するものと捉えられており、ある集団の中で高い地位に就いている人のみがリーダーシップを発揮することを求められてきた。しかしこれからは、リーダーシップは人に帰属するものであり、その人の地位にかかわらず全員にリーダーシップを発揮することが求められてくる。加えて、リーダーに求められる役割も変化しつつある。これまでは「指示や命令」することがリーダーの仕事であったが、今後は「支援・奉仕」といったものがリーダーに求められる。ここで改めて、「誰もがリーダーである」ということを皆、認識した。

### 多元型リーダーシップの紹介

ほとんどの人が「リーダーとはその場を率先してリードしてくれる人」と考えてしまいがちだが、ここでは、リーダーシップとは一つの型だけでないということを学んだ。「内からのリーダーシップ (Leadership from Within)」「前からのリーダーシップ (Leadership from Front)」「横からのリーダーシップ (Leadership from Beside)」「後ろからのリーダーシップ (Leadership from Behind)」といった異なるリーダーシップを、全身で意識して捉え、学んだ。

10分の休憩の後、4人～6人のグループワークを行った。「あなたはどのリーダーシップが欠けているのか。どのリーダーシップを訓練していきたいか」という問いに対して各々の立場をグループ内で発表してもらった。その後、「前からのリーダーシップ」の役割をグループ内で順番に経験し、グループ内のトークを指揮してもらった。

### リーダーとしての学びの道のり

青木先生は全4回のセミナーを通じて、経験に基づきながら、どのように学んでいってほしいかを我々に説明してくれた。

- ①セミナーで新しいコンセプトを学ぶ → ②活動やディスカッション、昼食時などで実践する → ③繰り返しの実践からどんな宝(新しい学び)を得たか振り返る → ④その宝(学んだこと)を周りにシェアする → ①次のセミナーで新しい内容を学ぶ

そして、青木先生は最後に「あなたは今日どんな宝(学び)を得ましたか。あなたが実践すべきことはなんですか?」と我々に問いかけて、第一回目のセッションは終わった。

## 主な学び

### 第一「リーダーシップとは?」

まずセミナー参加者自身が、なりたいリーダーシップを考え、本コースで、何を学び、どの様なリーダーになりたいのかを捉える。それをグループ・ディスカッションで、他者と考えを共有し、色々なリーダーシップが存在する事、様々な学ぶポイントがある事を把握し、リーダーシップの多様性を共有する。

### 第二「挑戦し続ける事」

リーダーシップにたどり着くべく、以下のフローで挑戦し続けることの重要性を学ぶ。

- 1) できない理由が分からない→

- 2) なぜできないかが分る→

- 3) 意図的に挑戦し、挑戦から失敗を繰り返す→

- 4) 意識せずにできるようになるまで挑戦する。

### 第三「これからのリーダーシップ」

今までのリーダーシップ概念がパラダイムシフトしていくことを学ぶ。

地位や権力で決まっていたリーダーが、パーソナリティーや魅力から決まるリーダーへ。何をするか、すべきかというやり方から、どう在るべきかという在り方へ。リーダーのグループへのアプローチが指示や命令から、支援や奉仕することへ。特定少数の人が占有してい



たリーダーという地位が、全員で共有し一人一人がリーダー的存在へ。今までのリーダー像から、新たなリーダー像へイメージをパラダイムシフトする。

#### 第四「多次元型リーダーシップ」

リーダーシップのあり方は一つでなく、様々なポジショニングがあることを学ぶ。

まずベースとして自身が自分のリーダーという内にあるリーダーシップがあり、そこから、前からリードしていくリーダーシップ、後ろから支えサポートするリーダーシップ、横(左右)から共創、アシストするリーダーシップ、四つのポジショニング(次元)のリーダーシッ

プを学び、各ポジショニングのリーダーシップを、ポーズをとることでイメージ、体感する。

#### 第五「リーダーシップの実践計画」

内なるリーダーシップが全員持っていること、多様なリーダーシップがあることを把握し、全員がリーダーであると再認識する。その上でセミナー参加者が、普段自身がどの次元のリーダーシップでいることが多いか等をグループディスカッションで把握、共有した上で、そこからどの次元を鍛えたいか、自身の実践していきたいリーダーシップの次元を認識し、船を通したラーニングプランの落とし込みをする。

## 2 リーダーシップ・セミナー II

### このセッションの目的

今回のセッションの目的は、PYがグローバルリーダーとして地球社会に向けての意識を高めるだけでなく、自分自身に対する意識を高めることであった。PYたちは、多元的なリーダーシップを踏まえて、前回のセッションから学んだことの振り返りを行った。その結果として、セミナーの焦点は、多元的リーダーシップから、内側からのリーダーシップに対する理解を深め、強化することに移っていった。例えば、PYは幸せの源泉やモチベーションの源や人生のゴールなど、自分自身の人生の目的について考えることとなった。このアクティビティにより、文化的な視点や感覚を交えながら互いのビジョンを

共有するという意味での学びの場となった。これらのコンセプトをより深く理解するために、アクティビティではディスカッションを行い、用語の意味を確認したうえで、PYが自身の人生の目標を概念化・視覚化することを促した。また、これらのアクティビティをより意義あるものにするために、セミナーの最初にはチェックインが行われた。これにより、PY自身の内側にあるリーダーシップに意識を向けることが可能となった。このアクティビティでは、同時に自身の体調や感覚を1-10(1=不良、10=良好)で計測した。

### 内容

チェックインの目的は、PYの内側にあるリーダーシップとのコンタクトを測ることで、自らの内側に意識を向け、その時の身体的あるいは精神的な状態を判断することにある。これをするために、まずはPYが1から10の数字を使って、自分の状態に対する質問を受ける。その後、PYはその状態について指を使って回答する。PYは、同じ数字を答えている他のPYを見付けてペアを組んだ。その後、ペア内で現在の状態を共有しあい、またその数字を答えた理由を話しあった。

#### テーマ

今回は、二つの大きな題目を扱った。一つ目は、グローバルリーダーとしてのあなた自身を強化すること、もう一つは、あなたやあなた自身の周りの世界について意識を向けることである。

#### 振り返り

イントロダクションとして、以下の質問についてグループで話し合った。

- 前回のセミナーにて、リーダーシップについて何を学んだか(特にリーダーシップの四つの側面について)

この振り返りでは、PYが個人の経験に基づいて、様々な場面でリーダーシップを発揮した経験を共有した。

#### 人生の目標

PYは、人生の目標について以下の質問を受けた。

- あなたを幸せにするものは何か?
- 人生の目標へのカギとなる、あなたのキーワードは何か?

## アラインメント

アラインメントの概念については、ディスカッションの場面で他人と協力したり譲歩しあったりする場面を理解するために扱われた。アラインメントには次の3段階がある。1) 受容（判断を介することなく意見や立場を受け入れる）。2) 理解（より大きな視点で理解するために、注意深くリスニングする）。3) 肯定・反対（両者がアラインされた状態に達する）。複数の人がアラインメントを行う例として、夫婦が夕食を決める際の例が用いられた。夫が豪華で記憶に残るような夕食を希望する一方で、妻はシンプルだが親密な夕食を望んでいる。結果として、両者が落ち着く決断は、夫婦の両者の希望を採用して、山小屋で夕食をする、ということになる。

## コーチング

コーチングの哲学を説明する際、五つのコーチングの文脈が紹介された。

コーチングの哲学「人々は生まれたときから創造的であり、恵まれていて、それでいて包括的である」。コーチングの5つの文脈とは、「興味、傾聴、直感、学習と行動、自己統制」である。

## 三つのレベルのリスニング

セミナーでは、三つのレベルでのリスニングについても紹介された。

レベル1：内側のリスニング（自己に注意が向けられる）

レベル2：フォーカスしたリスニング（他人に対して強い注意が向けられる）

レベル3：グローバルなリスニング（穏やかな注意が360度に受けられる）

PYがこの3段階のリスニングを理解するために、この三つのレベルを実際に体験するアクティビティが行われた。

## 主な学びと参加青年からのコメント

セミナー終了後、次回のセミナーを向上させるための改善点と同時に良かった点に関するたくさんのコメントをいただいた。これらのコメントは、参加青年の要望に応じていくため私たちに向けられたコメントとしてアドバイザーとリーダーシップ委員会の両者に役立っている。以下に2人のセミナーのコメント例を挙げる。

PY A：いいセミナーだった。異なるレベルのリスニングについて学んだことが本当に楽しかった。私たちは、普段他者の意見を聞く時間が限られているが、ときに他者の意見を聞く時間を設けている。リスニングレベル2を学んでいるときに、私はより有益な会話を他のPYから聞くために自分の神経を集中させていくことができた。

リスニングレベル3もまた、周囲への声に集中し、聞いて理解をしていく助け舟となった。また、コーチングの哲学も楽しめた。私は今まで自分が創造力のある人だと感じたことはなかった。しかし、今私は生まれつきの性格を理解していくことで創造力をよりいかすことができると信じている。創造力などの特質を得ることについては理解が薄いですが、力強いリーダーになるための理解は深まっていたと思う。さらに、このセミナーに参加する前では、私はリーダーシップとは一つだと思っていた（社長のよう）。今ではみんながリーダーになれる理由を理解している。

PY B：私はセミナーを楽しめたが、もう少し実践的な要素を学びたかった。セミナーの間に議論された、たくさんの概念のように、曖昧なセミナーとは対象な具体的なことを学びたかった。私は、自己の位置づけについて学ぶことが楽しい。他者の意見に全体的に同意できないときでも、どのように解決へ導くかについてより理解できたからである。リーダーシップについてのいくつかの概念は繰り返されていたので、プレゼンテーションでは重複されている点が多かったと感じている。私たちは似通った活動に時間を使いすぎていた。その結果、私はプレゼンテーションの間グループの集中力は時間がたつにつれてなくなっていたと感じる。

最後に、リーダーシップ委員会は他のPYからの大切なコメントを理解、確認している。コメントを受け取ること、私たち自身もセミナーの準備することの手助けになる。私たちが、相互的にそして具体的な内容でセミナーを提供し、グループワークのニーズに応える手段として使用している。私たちは何がPYを引き付けるのか、何を課題に意図を理解し動機付けしていくべきなのか、フィードバックを提供してくれたことに感謝している。

私たちは、明白な意見と構想上の批評の両方のフィードバックを受け取れたことによりとても励みになった。

### 3 リーダーシップ・セミナー III

#### このセッションの目的

このセッションの趣旨は、参加青年をグローバルリーダーとして強化すること、世界に対する課題意識を醸成することであった。セッションの初めに、PYの意識を内側に集中させ、内側からのリーダーシップを確認するため、チェックインのアクティビティを行った。これは、同時にPYの現在の内面の状態を、1-10（10＝最高の状態、1＝非常に悪い）の尺度で確認した。その後PYはこれまでの2回のセッションで学んだことを振り返る

時間を持った。そして人生の目的（何がモチベーションや原動力となるのか、何のために生きているのか）について考え、各自の経験を共有することによって、文化的な視野と互いに対するセンシビリティを広げる学びの機会が提供された。これらのコンセプトをより理解するために、キーワードや自身が持っている才能を明らかにし、人生の目的について各自が概念化、視覚化した上で、PYの間でディスカッションを行った。

#### 内容

##### ワールドチェックイン：

このチェックインの活動の目的は、PYの意識を内側に向けることで内側からのリーダーシップと接すること、現在の感情の状態（身体、心、マインド）を評価することだった。PYは自身の状態を1-10の尺度で測り、それを指で示した。PYは同じ尺度の感情や内側の状態を持っていた他のPYとペアを組み、その数字を選択した理由について、その数字により表現される感情について共有する時間を持った。

##### 省察（リフレクション）：

テーマの説明に続いて、振り返りのための質問が投げかけられた。

「リーダーシップについてこれまでのセミナーから何を学んだか、特に他者との間にエンパワーリングな関係を築くこと、他者をエンパワーすることに関して何を学んだか」

「互いをエンパワーするために、どのツールやコンセプトを使うか」

この振り返りによって、PYは自分自身がエンパワーされた経験や他者をエンパワーした経験を共有し、互いにエンパワーし合うことが、リーダーシップ・セミナー全体の鍵となるコンセプトであることを確認した。これらの個人の経験に基づくストーリーにより、各自がプログラム中に他のPYの成長にどのように貢献しているかについても共有された。

##### ライフ・パーパスの再考

2回目のセミナーで行われたライフ・パーパスに関する活動に引き続き、参加青年は自分たちのライフ・パーパスを改めて見直すよう指示された。この作業をするに

当たって、以下二つの課題を達成することが求められる。

- ・「関係促進において、ライフ・パーパスのキーワードを集める」
- ・「ライフ・パーパスのキーワードをリスト化する」

キーワードを集めたりリスト化したりすることで、参加青年は自分たちのライフ・パーパスをより意識することができる。ライフ・パーパスとそれにより良い定義付けを与えるようなキーワードを結びつけることで、この活動は参加青年のライフ・パーパスを概念化させる（例：キーワード＝幸せなライフ・パーパスは他人も幸せにする）。

##### グローバルな認識と責任

この回では、参加青年がそれぞれに問題視する社会問題について考え、述べる機会を与えられた（例：人権、環境、食料問題等）。続いて他の参加青年と共有することで、それらの問題に対する認識はより広げられる。より多くの人と共有するために、ディスカッションの形としては以下のような方法がとられた。参加青年は外側と内側に計二つの輪を作り、内側にいる青年が2分ごとに周り外側の青年一人一人と話をした。その後最も重要視する問題を三つ定め、解決のためにはどのような責任を取るべきか、または貢献すべきかについて考えた。そしてそれらの問題に対して強い関心を持つ他の参加青年を見付けるよう促された。方法としてはキーワード・カードが配られ、三つの主なライフ・パーパス、三つの社会問題と対応策、また対応策における自分の強みを書き記した。この演習の意図は、自分と似たような関心を持つ人と協力し合うことで、自分のライフ・パーパスと問題解決能力を結び付けることである。

## 主な学びと参加青年からのコメント

セミナーを終えて、称賛や改善の余地がある箇所について多くのコメントをいただいた。これらのコメントはアドバイザーだけでなく、この船で参加青年が必要とするようなより良い指揮を与えてくれるものとして、リーダーシップ委員会のメンバーにとっても有益である。以下に二つの例を挙げる。

参加青年 A：自分と似たような、もしくは同じようなライフ・パーパスを持つ青年たちとつながれたことでとても刺激された。私が大いに重要視している環境問題についてディスカッションできたことは有意義だった。他の青年もこの問題を深く懸念していることに気付けたと同時に、彼らにとってもライフ・パーパスであることを考慮し、諸問題が解決されることを願っている。

参加青年 B：輪になって行ったディスカッション演習の時間がもっと欲しかった。多くの参加青年から彼ら自身の問題や変化を聞いたが、深掘りできる時間があればより良かったと思う。そうは言うものの、チェック・イン・

アクティビティやレター・グループ単位での意見交換は私にとってとても興味深いものだった。自らの船上におけるエンパワメント・ストーリーについてレター・グループのメンバーと共有する機会を得られたし、同時に皆の話も聞くことができたからだ。

結果として、リーダーシップ委員会は他の参加青年からフィードバックをもらうことの重要性について理解し、認識している。次のセミナーを自分たちで開催するうえで、より良いものをつくるために大いに役に立った。そのセミナーを他の参加青年にとって興味深く、双方向性があり、実用的な内容にするのと同時に、彼らのニーズを満たすためにこれらのフィードバックをいかす所存である。最後に、前向きなフィードバックは委員会のメンバーにモチベーションを与えたと同時に、何が参加青年のためになり、どのようなセミナーが魅力的であるのかを教えてくれた。このことについて感謝の意を述べた。私たちは前向きなフィードバックと建設的な批判の両方にとっても助けられた。

## 4 リーダーシップ・セミナー IV

### このセッションの目的

本講義の目的は、前3回の講義をいかし、PY自身が触発を受けた人生経験を共有することによって、PYをエンパワーすることであった。又、本講義はアドバイザーであるさとみ先生のサポートを得ながら、リーダーシップ・セミナー委員によって進められた。はじめに、TEDトークを利用してlollipopの概念を紹介された。この動画は、生活の中で他者を励ましたり、リーダーシップの役割を担う瞬間を、若者に自覚することを促すものである。何人かのPYは自分の経験を共有し、聴衆であるPYも耳を傾け、様々な形でサポートした。休憩後、前

回の講義で使用されたワークシートを元に、環境、食、人権、教育、ユースエンパワメントの五つの小グループに分かれた。それらのグループ内で、より特定されたプロジェクトについて話し合えるように、さらにグループ分けを行った。このように形成されたグループごとに、将来に向けてのプロジェクト提案、又事後活動の計画としても有効なプロジェクトの計画書を作成した。話し合われたプロジェクト内容は、グループごとに簡単に発表され、将来の共同プロジェクトへのサポート又参加を促すきっかけとなった。

### 内容

導入部：委員会のメンバーでPYを温かく歓迎し、講義はアイスブレイキングから始まった。日本の伝統的なリズムゲーム（アルプス一万尺）を行い。JPYからOPYにリズムを教えさせることで、互いの仲を深めることを目的としていた。

ビデオ：5分間にわたる、行動または“Lollipop moments”によるリーダーシップについてのTEDトークを共有した。このビデオは聴衆を鼓舞するスピーチを

含んでおり、リーダーシップへの理解促進、自分自身がリーダーであると自覚する勇気を持つこと、人々の生活を変えていく行動を尊重することを訴えている。

ライフストーリー：委員会の二人が、カンフーパーダの引用を用いたリフレクションのセミナーを行った。PYにロリーポップストーリーを共有する前に、全ての語り手をサポートするための次のフレーズがスクリーンに映し出された：「私は完全。私には、才能がある。私

には、想像力がある。私はリーダーで、他者の心を開くことができる。私は尊敬するに値する。私は愛される価値がある。今ここにいることを誇りに思う」

約10人の参加者が、一人一人、参加者を触発するために、明日さらには今日のリーダーになるために、ステージに立ってそれぞれの話を共有した。設けられていた時間終了後も、ライフストーリーのシェアを待つPYの列は続いていたため、時間を延ばしよりたくさんの方が話す機会を得ることができた。

### 主な学びと参加青年からのコメント

若者は、自身について話し表現できる場所、そして明日のリーダーとなるために他者に影響を与え、又影響を受けることができる場所を強く求めている。このような機会は、参加者がより自信を持ち、新しいリーダーシップの形や未来へ向けた計画の実現を目指して、心を開くきっかけになる。

全体的に、フィードバックは前向きであった。参加者は真剣に思いを共有し、耳を傾けていたことが挙げられる。本セッションにおいては、ステージに立って人前で話すことが、初めての経験であった参加者が多く見受けられた。

### プランニングシートのワークショップ：

小グループは、セミナー3に基づいてトピックごとに分けられ、プランニングシートが配布された。各グループで、そのトピックに基づいた問題について話し合い、問題を解決するためのプロジェクトを計画し始めることができた。このプランニングシートは、PPAP（事後活動計画）としても機能すると考えられる。何人かの参加者は既にその分野で問題に取り組んでおり、自身の経験を他のPYに共有してくれた。最後は、それぞれのグループがプランニングシートについて公聴者の前で話した。

リーダーシップ委員会は、このセミナーの評価や計画の実行から多くのことを学ぶと同時に、実りあるセミナーを創ることができたと感じている。このセミナーの後に、多くの方が他参加青年の考えを知ることのできる機会を設ける多ために、本セミナーを再現し、同じように話を共有するようなスペースを作っていた。

Ship for World Youth 29th という多様なグループの中で、たくさんの異なったリーダーシップがあった。今、PYたちは、自分の持つリーダーシップに気付き、生活の中でそのスキルをいかし行動を起こしていくと決心している。

## プロジェクトマネジメント・セミナー

プロジェクトマネジメント・セミナーは、以下の成果をねらい、全参加青年が参加するセミナーを4回実施した。

- プロジェクトを実施する上で基礎となる、プロジェクトマネジメントの概念を理解する
- 参加青年はプロジェクトマネジメントの概念について

理解し、プロジェクトを計画・実施する際、より実現可能な形で企画・提案ができるようになる（論理的思考力、企画力を身に付ける）

- プロジェクトの計画、準備、実施、評価の各段階で活用できる具体的なマネジメント手法を学び、活用できるようになる

### 1 プロジェクトマネジメント・セミナー I

#### このセッションの目的

1. プロジェクトマネジメント導入。
2. 国際的に使用されているプロジェクトマネジメントの一つの手法を学ぶ。
3. 自分の夢や願いを実現させるためのプロジェクトを立てる。

## 内容

このセミナーでは、プロジェクトマネジメントの導入及び国際的に使用されているプロジェクトマネジメントの一つの手法 (PCM 理論) について学んだ。PCM とは、プロジェクト・サイクル・マネジメントの略である。そのサイクルを完成させることによって、プロジェクト全体を要約したロジカル・フレームワークを作成することができる。そのサイクルの各段階について、詳しい説明がなされた。PCM プランニングは、ステークホルダー型、問題解決型、客観分析型、課題選択型、ログフレーム型の五つから構成されている。それぞれの分析型の理論についての説明の後、ペアワークを実施した。レター・グループ毎に誕生日順に円形に並び、隣に並んでいた PY とペアを組み、パートナー (エンジェル) と協力してプロジェクトを作り上げた。

以下は実施した内容である。

- (1) 自分を説明するための七つの言葉をそれぞれ付箋紙に記入し、パートナーと意見交換。
- (2) 自分の夢や願い (バイクに乗ること等) を七つそれぞれ付箋紙に記入し、パートナーと意見交換。
- (3) 自分の夢や願いを叶えるために必要なことを七つそれぞれ付箋紙に記入し、パートナーと意見交換。
- (4) パートナーとワーキングペーパーを交換し、パートナーの 7 つの長所や可能性について記入し合い、その後なぜその長所や可能性を記述したのかお互いに説明。

これらのステップは「天使 (エンジェル) のささやき」と呼ばれている。

ペアワークの後、問題の分析方法について学んだ。三好先生から、「三好先生の奥さんが怒っている」という簡単な例と共に、問題解決とは、問題のコアに到達するまでなぜかを質問し、理由を答え続けることにある旨の説明があった。

アクティビティとしては、各々が主要な問題について書き、問題のコアに到達するためにフローチャートを作成するものであった。その後、消極的観点を積極的観点に置き換える客観的分析を行った。例えば、「過労」ではなく「効果的に仕事をする」と置き換えることで問題の解決につながる。

プロジェクト選択の課題も与えられた。それぞれの夢や課題を比較し、どれが最重要かを決めるというものである。

プロジェクト選択の基準は、有効性、効率、影響、妥当性、持続可能性についての評価マトリックスを作成した。そして、フローチャートを作成した後に再度ペアワークを実施した。カード上の自分の好みのものに丸を付けてから紙を交換し、それぞれのパートナーが興味を持つであろうと思うものに丸を付けた。

Log-Frame の一つのイメージについての簡単な説明のほか、Objective-Tree から Log-Frame への課題も与えられた。

## 主な学びと参加青年からのコメント

- インフルエンザ蔓延防止のための謹慎対策期間に実施された、プロジェクトマネジメントの課題は特に有意義であった。しかしながら、そのプロジェクトは表面的な知識の取得のみに留まっており、根本的な理解にはつながらず理論的に不十分であった。より深い知識を必要とするなら、三好先生に直接コンタクトすると良いと思う。
- エンジェルとのペアワークで、私のエンジェルは自分が英語に自信がないのを励ましてくれた。自分が常に接していたのは日本語が堪能な外国人ばかりだったため、英語で話すことがほとんどなく、環境に甘え切ってしまう部分が多くあったように思う。自分は経済的理由で留学を諦めようとしているエンジェルを励ました。お互いに、自分では気付くこと

ができなかった長所や可能性に気付くことができた。付箋紙に一つずつアイデアを書きだしていくアクティビティはとても面白かった。

- ペアワークの際、自分を表す七つの言葉を探し当てるのに悩んだが、初めての経験だったので大変面白かった。私のエンジェルは、自分でも気付かないくらい多くの長所や可能性を書いてくれて大変励まされた。また、国際機関で働きたいが難しいと思っている旨エンジェルに打ち明けたところ、自分の関心と近い分野を実際に学んでいる他の PY を紹介され、有意義な意見交換をすることができた。ペアワークを通じて、関心を同じくする PY とつながることができて良かったと思う。

## 2 プロジェクトマネジメント・セミナー II

### このセッションの目的

講義の目的は以前の全てのプロジェクトマネジメントのセッションでの学びを委員会メンバーが率いる「楽しさ」、「教育」、「安全」なアクティビティと合致させることである。委員会メンバーが共に仕事をし、プロジェクトマネジメントのスキルを使う機会を与えるためにセッションのほとんどは委員会メンバーによって運営された。委員会の共同作業により3時間の実践的な学びを伴

う講義形式を行うことができた。実践的な学びを伴う講義では、問題解決、コミュニケーション、タイムマネジメントをレター・グループ毎にゲームとして実施させた。そして講義の最終パートでは、小グループでプランニングと実践の際にあり得るプロジェクトと様々な要素について話した。

### 内容

プロジェクトマネジメント委員会のメンバーはプロジェクト・マネジメントプランの遂行に関連するトピックについて発表した。トピックはSWOTとSMARTという二つのプランニングツールに焦点を当てた。その二つのツールがどのように使われるか説明し、またどのような状況で使われるか探った。SWOTについては、参加青年たちはSWYの出発点であるNYCの状況を小グループで議論した。そのプレゼンテーションはコミュニケーション、リスクマネジメント、タイムマネジメントを含んでいた。プロジェクトマネジメントのこれらの要素を説明し、関連する状況と課題を持ち出した。

第2パートでは参加青年をレター・グループ毎に分け、

虚偽の殺人の謎を解かせるゲームを行った。グループは時間をマネジメントし状況に関連したタスクを完遂するために、コミュニケーション、チームワーク及び問題解決能力が必要とされた。

最後のパートは、プロジェクトマネジメントのケーススタディを小グループで行った。プロジェクトのプランニングの始め方を探るためケースを各グループに紹介した。そのグループはプランニングの重要な部分を交渉し、行動計画を練る必要があった。前セッションで用いたプランニングマトリックス（ログフレーム）がそのケーススタディにおいて使われた。

### 主な学びと参加青年からのコメント

#### プロジェクトマネジメント・セミナーの評価報告

##### 1. 背景と目的

2017年2月21日、SWY29のプロジェクトマネジメント委員会によってセミナーが行われた。セミナーの最後に各参加青年にアンケートを配布し回収した。アンケート調査の目的は以下のとおりである。

- 1) 「教育」、「楽しさ」、「安全」の点でセミナーの質を評価するため
- 2) 最終ミーティングで学びを書く参考として情報を得るため

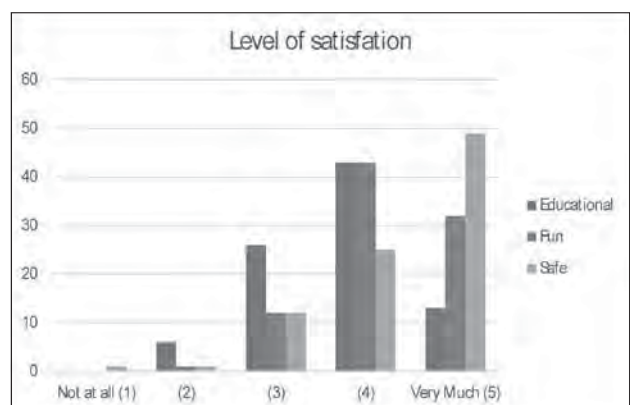
##### 2. 手法

セミナーでアンケート用紙が配布された。マーファを中心とした委員がデータをインプットし、アドバイザーの三好先生の技術的サポートを受けデータ分析を行った。

##### 3. 結果

合計88枚が回収されインプットされた。「教育」、「楽しさ」、「安全」の観点で参加青年のセミナー

に対する満足度を5段階で測った。



	Educational	Fun	Safe
Mean	3.7	4.2	4.3
Median	4.0	4.0	5.0
Standard Deviation	0.79	0.70	0.85

以上の結果から参加青年がセミナーに対し満足していることが読み取れる。

# アドバンス・セミナー

アドバイザー主導によるアドバンス・セミナーは、三つのセミナーを同時開催し、全体で実施するセミナーに比べると高度な内容を扱った。全参加青年は自分の興味

のあるセミナーを選択し、2回シリーズのセミナーを受講した。

## 1 異文化理解セミナー

### このアドバンス・セミナーの目的

日本文化の影響、その組織行動をいかに深く理解するかを提供する。なにがこのレクチャーをおもしろく興味深くしているかという点、日本のオフィスの文化を西洋の見地から注目している点だ。この中に誤解と仮定と文化的負荷がある。しかし、この混乱が異文化理解を引き起こす。このアドバンス・セミナーはセミナー講義者

が持っている文化間を超えたより洗練された知識の経験を、受講者と共に議論する機会を提供する。この活動の目的は過去に一度説明したが、どのように日本文化がその組織の行動に影響を与えるかということにより深く理解するためのものだ。

### 内容

1. 最もよく知られている日本の組織の一つである富士通の経験に基づいた、日本人と西洋人の雰囲気の違いと比較。
2. 日本文化の特定の側面の発展
  - 1) 関係  
日本のビジネスマンは結婚するまで昇進できないと言われていた。それは、家のあらゆることをするために妻が必要であり、彼らが仕事に集中できるようにするためである。この傾向はまだ残っていて、日本の男女平等問題を引き起こしかねない。
  - 2) 調和  
関係の管理と調和を保つことは日本の会社にとって最も重要なことである。論争はどんな犠牲を払ってでも避けなければならない。西洋人にとっては、関係は目的の二番目になる。彼らは仕事を向上させるために必要な場合での論争は推奨さえない。
  - 3) 意志決定  
一般的に言えば、これが日本のオフィス文化が強調していることである。彼らは皆にとって都合のよいディスカッションの過程を必要としている。例えば、春に、春闘という会社のユニットや従業員がデモ行進に参加することによって昇給を要求する。それはデモンストレーションのようであるが、実はただの儀式である。交渉がいくつかの論争を起こさないために、それぞれのグループの意志は前もって知られている。
  - 4) リーダーシップ  
青木サトミ先生によって行われたリーダーシップ・セミナーによると、日本人は後方からのリーダー、また

は指導者になる傾向がある。これは彼らが直接的な指示を与えず、従業員は自発性を持たなければならないということの意味している。西洋の人々は、前方からのリーダーになる傾向がある。彼らは命令、指示そして目的を明確に与える。改めて、彼らは含まれている人々との関係性よりも結果重視している。

#### 5) 家父長的態度

仕事が一番であり、家族、関係性、仕事など全ては日本の社会では二番目になる。西洋の文化では、反対であり、自身、家族、仕事、国である。

#### 6) 長期雇用

日本文化は終身雇用を重要視している。最近それらは変わりつつあるが、まだそれは日本社会に強い影響をもたらしている。日本人従業員は仕事に彼ら自身を捧げる傾向がある。代わりに、その仕事はふつう安定し、日本人はなかなかクビにならない。西洋の組織は、より早く従業員の回転がある。

#### 7) 信頼と関係性

企業は、従業員一人一人を家族の成員のように扱う。家族の成員として受け入れ、様々な面で面倒を見る。その見返りとして従業員には、会社への忠誠と会社のために尽くすことが求められる。

#### 8) グループと集団主義

日本文化では、上記のような価値観や規律から、人々は自分自身よりも集団を優先しなくてはならない。これは、上記5)で揚げた家父長的態度にも表れており、家族や仕事、国家に対して、個人や個人の欲求は優先順位が低くなる。これに対して西洋では、個人や家族



の生活が仕事よりも優先される。さらに、西洋の組織では、繁栄や経済、国家などよりも利益に重要性が置かれる。

9) 責任と失敗

日本では、個人の責任にはあまり重きは置かれず、集団責任が重要視される。企業は家族のようなものなので、失敗の具体的な責任者はあいまいにされ、皆が責任を共有することになる。これに対し西洋では、成功例であっても失敗であっても、特定の部門や個人に功績や責任が帰される。これは、より個人主義的な文化によるものである。

9) 労働倫理

日本には、非常に厳しい労働倫理があり、各従業員は仕事に献身しなければならない。過労死が起きているのは日本だけである。これに対して、西洋文化には労働倫理や雇用に関する異なる価値観がある。

10) 失業

11) 訓練と社員育成

日本の企業は、社員の育成や訓練、そして人的つながり作りによくの投資をしている。一方西洋の企業では、従業員向けの投資は少ない。儒教の影響から、一般的に日本企業では従業員は元来誠意ある行動をすると考えられている。このことは、法的行動に影響を与えている。全ての文書には「誠意条項」というものがあり、どのような法的条項があってもこの条項をもとに話し合いをすることができるようになっている。日本文化では信頼と敬意がとても高い価値を持っているため、行動の結果よりも動機が重要視される。

3. 上に挙げた日本文化の11の側面と西洋文化との比較。ほとんどは全く逆である。
4. これらの気づきが異文化間ビジネスコミュニケーションでどのように役に立つかを議論することにより、このような側面により意識的になり、理解ある態度を持てるようにする。

主な学びと参加青年からのコメント

PYの中でディスカッションをして意見を交わすことは講義の中の理論や鍵となる考えを理解することに変役に立った。このアドバンスセミナーはOPYはもちろんJPYにとっても新たな知見をもたらし、参加を促すことができるものであった。多くの日本人参加者は神道や日本人論といった考えにどれほど現代の日本の社会組織が影響を受けているか考えたことはあまりないだろう。人々の行動、価値観、そして規範がどこから生まれ

ているのかを知ることで、異多文化の人々に対してより忍耐強く、より理解が深まるだろう。つまり、自身の文化の理解が異多文化理解を容易にするのである。

- 異文化間国際的なコミュニケーションにおいて、大変実践的で有効な講義だった。(外国青年)
- 日本で働く人としては、かなり基礎的な講義だったと感じざるを得ない。講義の内容のほとんどは既に知っていた。(日本人参加青年)

2 リーダーシップ・セミナー

このアドバンス・セミナーの目的

2回行われるアドバンス・セミナーは、同様の講義を日本語と英語の両方で行われた。これまでの通常の講義を踏まえた上で、より深くリーダーシップやコーチングについて知りたい参加者に向けた講義である。具体的に記述するといくつかの目的が挙げられる。第一に、青木先生がリーダーシップ論の土台としている理論を紹介することである。これまでの講義の中では、科学的に証明することができないようなリーダーシップ論に、批判的な意見が見られた。そうした批判的な参加者に対して、

青木先生の持論が生まれるプロセスや経験を紹介することで、納得を促すことが期待された。第2の目的としては、リーダーシップの在り方をより具体的に学ぶことで、リーダーシップを意識的に使えるようになることが目的として挙げられる。自身の特性を理解することで、得意な部分はいかしながら、苦手な部分を改善することができる。さらに、講義の中で隣の人とシェアする時間を積極的に設けることで、感覚的な学びをより深いものに行うことができる。

内容

講義：まず、青木先生が学んできたリーダーシップ論、及びコーチングの手法について紹介された。そのコーチング手法は、自然の哲理を根本としたマヤ文明に由来す

る。この紹介によって、コーチングの習得が決して容易ではないこと、限られた人しか教鞭をとる資格がないことを知った。

次に、Wheel of Power Allies の概念が紹介された。Wheel of Power Allies とは、八つの要素から構成されており、人が本来持つ力を表したものである。具体的には、Strategist (直感に従って決断する能力)、Shapeshifter (エネルギーを自身の生命力へと転化できる能力)、Creator (限界を超えて可能性を生み出す能力)、Sharman (現在に集中できる能力)、Explorer (生命を信じられること、勇気)、Pathfinder (使命のある道を判断できる能力)、Healer (自己治癒の能力)、Seer (時を見定める能力) である。これらの特性を理解することで、意識的にリーダーシップへと応用することができる。講義の進め方としては、一通り Wheel of Power Allies の概念が紹介された後、自身の体験に照らし合わせて、それぞれの項目

を理解しようと努めた。

ディスカッション：その後、以下の項目に従って、隣の人とディスカッションが行われた。①上記の八つの項目を、私生活の中で感じるときはいつか、②八つの項目を象徴するもの（人、男性、女性、植物、動物、アニメキャラクターなど）をイメージする、③八つの項目を覚えやすくするために名前をつける、④どの項目の特性に親しみを感じるか、又感じにくいのか。Wheel of Power Allies は感覚的な学びであり、ディスカッションでお互いの経験や考えをシェアすることで、想像が容易になり理解の促進に寄与した。

### 主な学びと参加青年からのコメント

講義は興味深く楽しかった。母国語である日本語で講義を受けることによって、通常の講義では単純化されてしまう英語での解釈に、より深みが生まれた。個人的に講義は良かったと感じるものの、全体の評価がそうで

あったとは言えないかもしれない。講義終了後、質疑応答において、いくつか質問が寄せられた。やはり、論理的に頭で理解することはできないといった彼らの印象を受けた。

## 3 プロジェクトマネジメント・セミナー

### このアドバンス・セミナーの目的

本セミナーの目的は参加青年にプロジェクトマネジメントの知識を与えることである。参加青年はこの一回のセミナーでプロジェクトマネジメントを全て習得するのではなく、要点を掴むことが期待される。“Project

Management Body of Knowledge” モデルを使って、参加青年は現在のプロジェクトの状況を改善し評価するのに役立てるために、練習では自身のプロジェクトのアイデアを使うことが求められる。

### 内容

1. プロジェクト—プロジェクトとは何か。プロジェクトの目的を設定する。プロジェクトプログラムポートフォリオモデルの実行。
2. 計画—プロジェクトの実行計画の重要性。(a) プロジェクト志向型計画 (b) 機能志向型計画 (c) バランスのとれた計画 (弱い) (d) バランスのとれた計画 (強い)
3. プロセス—プロジェクトの段階、プロセスとライフサイクルの始めから終わりまで。
4. 統合—プロジェクト計画ドキュメントとプロジェクトの特性を用いた全ての知識の実行可能なマネジメントシステムへの統合プロセス。プロジェクトの特性—計画のリソースをプロジェクトの運用に適用するために、正式にプロジェクトの存在を認定し、プロジェクトマネージャーに権限を与えるプロジェクト発案者もしくは賛同者によって発行されたドキュ

- メント。プロジェクト計画—プロジェクトがどのように実行、チェック、管理されていくかを説明した文書。全ての派生する計画を統合し、基準が計画プロセスを作り上げる。
5. 範囲—プロジェクトの責任が及ぶ範囲。
6. 時間—プロジェクト計画における「時間」の重要性。
7. 費用—プロジェクトの予算編成、見積もりの重要性。
8. 質—「七つの質管理の規則」を取り上げ、参加青年のプロジェクトに適用する。
9. 人事—プロジェクトに人事の分野が重要なのか。(a) 組織チャート (b) 責務チャート (c) 任務説明
10. コミュニケーション—プロジェクトにおけるコミュニケーションの重要性。コミュニケーションは対一かグループにおいて起こる。参加青年のコミュニケーションに対する理解を促すために「送り手/受け手」モデルを使ってコミュニケーションの重要性が

示された。

11. リスクプロジェクト中に起こり得るリスクを予測し備える。
12. 調達—自身のプロジェクトに影響する意思決定の重要性。

13. ステークホルダー—プロジェクトの進行状況についてステークホルダーが情報を共有していることの重要性。プロジェクトには多くのステークホルダーが関わっており、各々異なる理念や考え方を持っている。

#### 主な学びと参加青年からのコメント

アドバンス・セミナーの内容はとても良かった。自身のプロジェクトに適用できる実用的な「ツール」を得られた。「時間」と「コスト」マネジメントは今計画しているプロジェクトでは考えたこともなかったことだったので、特に興味深かった。これまで「リスク」に関しては深く考えたことがなかったが、セミナーのおかげでこ

れからは注意していこうと思った。

プロジェクトを実行する際にPMBOKの知識はすごく役立つ。自分にとっては、時間と費用のマネジメントは非常に大切な要素であると思った。次に自分がプロジェクトをするときには成功するような気がした。

# PY セミナー

PY セミナー（参加青年が主体となって実施するセミナー）は、以下の成果をねらい、3回実施した。参加青年は各自、興味のあるセミナーを受講した。

## 【セミナーを主催する参加青年】

- 自分のこれまでの経験や専門分野をまとめ、「人に伝える」という経験を通して、プレゼンテーション能力を高める
- 多国籍の人々の前に立って英語で発表し、セミナーを

ファシリテートするという経験を通して、リーダーシップを学ぶ

- セミナーを実施することにより、プロジェクトの企画・立案から実施までを実践できる

## 【セミナーを受講する参加青年】

- 同じ事業に参加している仲間にとどのような背景を持ち活躍している人がいるかを知ると同時に、各国における青年層の取組について学ぶ

## PY セミナー一覧

主催者の国籍 (開催時間)	セミナーの題名	発表者名	目標
ブラジル (60分)	あなたのアマゾン度 チェック！ ーエコツーリズムとアマ ゾン熱帯雨林ー	Rafael Daniel Gerzvolt	アマゾンの熱帯雨林とその重要性について知ってもらう。またエコツーリズムのコンセプトを参加者に紹介したい。未だインフラが整備されていないにもかかわらず、観光と共にあるブラジル・アマゾン熱帯雨林が、どのように変化してきたのか、またどのように守られていくべきなのかを説明する。最後には、アマゾン熱帯雨林地域におけるエコツーリズムの変遷を理解してもらう。
ブラジル (60分)	日本人のブラジル移住 ー歴史と遺産ー	Sayuri Sakamoto	日本人移民の歴史や彼らがその時代に直面していた問題について伝える。また、ブラジル社会の中で近年その移民がどのような影響を与えているのかを示す。
カナダ (60分)	グローバル規模の 農業不振脱却のための イノベティブソリューション	Jennifer Whittaker	私たちが日々口にしているものは、どのように育てられ、どのような経緯で私たちの食卓に並ぶのかを参加者に知ってもらう。それだけでなく、最新の農業システムやなぜそのシステムがその方法でその形にされているのか、農業が抱える環境と社会への影響についても紹介していく。発表が終わる頃には、参加者自身の人生や環境における食への考え方に新たな視点が加わっていることを目指す。
カナダ (60分)	気候変動への適応 ー世界の現状とその対応策ー	Gabrielle Tremblay Henry Tsang	パート1：気候変動によるインパクトや対応策についての意識を高める。世界中で起きる気候変動のインパクトの概観、世界中の気候変動への対応策の概観、気候変動や環境悪化に対抗するための持続可能な解決策を見付けるための参加型アプローチ、気候変動に対する解決策と新しい見方を学ぶ。 パート2：気候変動による都市や建築物に対する影響、自然災害の原因と復興のためにデザインできること、都市生活の未来について議論する。
カナダ (60分)	カナダ(カナダ)の先住民 ー辛抱強いカナダ人の苦 難と成功秘話ー	Killaq Enuaraq- Strauss Moussa Sène	カナダの先住民族について学ぶ。参加者はカナダの歴史の一部から、カナダ社会にあった人権侵害や慢性的な不平等を学ぶ。最も重要なことはカナダの先住民族の、他には見られないような復活の経緯について知ることにある。つまり、その復活の経緯の中で行われた環境損失について、社会正義としてどのような戦いが行われたのかを知ることが重要である。